
暗殺者と魔法使い

無銘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺者と魔法使い

【Nコード】

N53580

【作者名】

無銘

【あらすじ】

某暗殺者が、ゼロ魔の世界に召喚されました。

＊注…更新可能な時に更新しているため、不定期更新です。
また、キャラクターの性格が違うなどの苦情はお受けできません。
(私的にキャラクターに対する意見の相違だと思っているため)
予めご了承ください。

召喚（前書き）

初投稿になります。色々好きな作品が混ざっていく予定ですの
で、生ぬるい目で見守ってください。

召喚

トリステイン魔法学院ヴィエストリの広場

ドッカーン！！

広場に爆発音が響いた。

「ミス・ヴァリエール、このままでは召喚失敗で留年ということになります。まだ続けますか？」

「お願いです、先生。もう一度だけやらせて下さい！！！！お願いします！！」

コルベールは少し考えた後、頷いた。

「ではもう一度だけ許可いたしましょう。」

「ありがとうございます。」

ルイズは精神力を振り絞ると、

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。世界のどこかにいる我が僕よ、この呼び出しに答え、ここに我が使い魔となせ！！！！」

カァァァァ！！！！

今度は爆発せずに『光った』。

へまた・・・失敗したの・・・？なんで成功しないのかしら・・・」
「おい！なにか居るぞ！？」

その声にルイズが顔を上げると光の中に何かが見えた。

大きさは180センチ程だろうか。黒い服を纏い、不気味な顔が見える。

「問オウ・・・汝ガ^{ナレ}・・・我が主カ^{マスター}・・・？」

「きゃあああつ！！」

「『ゼロ』のルイズが悪魔を呼び出したあああつ！！」

「先生、助けてえええつ！！」

「ママアアアツ！！」

「落ち着いて、皆さんは急いで学院に避難を！！ミス・ヴァリエール、その者は貴女を主人と認識しているようです。コントラクト・サーヴァントを。」

「モウ一度・・・問ウ・・・汝ガ・・・我ノ主カ・・・？」

「うゝゝゝ。我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我が使い魔となせ。」

「グ・・・グルアアアッ!!」

（悪魔と契約ってできるのかしら？死んだらやっぱり地獄に行っちゃうのかな？その前に、今ここで死んじゃうのかな？）

「グルアア・・・アア・・・ア・・・ア・・・」

「先生、終わったみたいです。」

悪魔（？）の左腕に使い魔のルーンが刻まれている。

「コントラクト・サーヴァントは成功したようですね。それでは一緒に帰りましょう。」

「三度目ニナルガ、汝が我ノ主力？ソロソロ、答エテ欲シイノダガ」

「どうもそうらしいわ。貴方は悪魔なの？貴方みたいな生き物は知らないのだけど。」

「我ハ悪魔デハナク『暗殺者』のサーヴァント、ハサン・ザーバツハ。主ノ名ヲ伺ッテモ宜シイカ？」

「ザーバツハというのね。私の名はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。よろしくね。」

「ココニ契約ハ完了シタ、今後トモヨロシク。我ノ呼称ハ『ハサン』トシテイタダキタイ。」

「ミス・ヴァリエール、授業に遅れますよ？早く教室に戻りなさい。」

「わかりましたコルベール先生。ハサン、行くわよ。」

「御意。トキニ主ヨ、モウ一ツダケ伺ッテモ宜シイカ？」

「ん、どうしたのハサン？」

「ナゼ、令呪が我ニ刻マレテイル？」

「・・・令呪？ああ、使い魔のルーンのことね。だって貴方は私の使い魔になったのよ？当然じゃない。」

「使い魔ナドヨリ、役ニ立ツトハ思ウガ。シテ、使い魔ノるーんトハ？」

「私と貴方の契約の証ってところかしらね。詳しいことは後で教えてあげる。」

「了解シタ主。」

SIDE…ルイズ

見た目は怖そうだけど、忠誠心は高そうね。
それにしても、『アサシンノサーヴァント』って、どんな生き物なのかしら？

召喚（後書き）

真暗殺者を召喚しました。宝具はオリジナル設定の予定です。

召喚した晩（前書き）

ありがたいことに、こんな駄作に感想をいただきました。

召喚した晩

―ルイズの自室―

「つまり、ハサンは異界から召喚されたというの？」

「肯定ダ。我ノ居タ世界デハ、月ハ１ツシカ無ク、魔術ハ徹底シテ隠サレテイタ。」

「簡単には信じられないけど、その容姿だったら魔界から召喚されたと言われても信じると思うわ。」

「信ジテモラエナクテモ一向ニ構ワヌガ、主殿。」

「な、何よ？」

「使イ魔ノ仕事ニツイテハ、概ネ了解シタ。デ、我ニ可能ナ事ダガ。マズ、秘薬ノ材料ヤ触媒ニツイテハ、何処カラドノヨウナ物ヲ採取スレバ良イノカ、
教エテイタダケレバ採取ハ可能ダト判断スル。」

次ニ、感覚ノ共有ダガ、オソラク不可能。仮ニ可能ダトシテモ止メタ方ガ良イ。

最後ニ、主ヲ守ル事ダガ敵ガ20人前後マデアレバ、守リキル事ハ可能ダト思ワレル。」

「じゃあ、今度何を採ってきたら良いか教えるわね。でも、20人相手だったら流石に負けるんじゃない？」

ハサンはたしかに強そうだとは思うけど、ドットクラスでもメイジ20人だったらどうするのよ？」

「我ハ自ラノ能力デ、我自身ヲ増ヤスコトガデキル。
マタ、使イ魔ノるーんノ効果ニヨリ、身体能力ガ向上シタ事モ確認
シタ。」

ソレヲヲ統合シタ結果、ソウ判断シタ。」

「自分を増やすって、『偏在』？貴方、風のメイジだったの？」

「我ハタダノ『暗殺者』ノ一人。我ハ魔術師デハナイ。」

「じゃ、どうやって？『偏在』以外で自分を増やすことなんて、ス
キルニル位しか思いつかないわよ。」

「すぎるにるガ如何ナル技術カハ知ラヌガ、我ハ我ノ所有スル宝具
デ我ヲ増ヤスコトガデキル。」

「宝具って、魔法具？あたしにも頂戴。」

「魔法具デハナク能力デアル。厳密ニ言ウト、我以外ノ我ノ能力ナ
ノダガ。」

「ハサン以外のハサン？どういうこと？」

「マズ、我ノ名『ハサン・ザーバツハ』トイウノハ、我個人デハナ
ク暗殺者集団ノ頭領ニ受ケ継ガレル名デアリ

我個人ノ名ハ無イ。ソシテ、我等『ハサン・ザーバツハ』ノ集団ガ
真ノ『ハサン・ザーバツハ』^{ザバーニーヤ}デアル。

ソシテ、我ノ能力ハ、『妄想変身』^{ザバーニーヤ}トイウ。

我以外ノ我、アルイハ我等ガ出会ッタ事ノアル人物ニ成リキリ、ソ
ノ人物ノ能力ヲ借リルコトヲ可能トスル。

我等ノ一人ガ我ヲ増ヤス能力ヲ所有シテイル為、我モ我ヲ増ヤスコトガデキル。」

「・・・参考までに聞くけど、ハサンの能力で原因不明の病氣は治せる？」

「シバシ待タレヨ。・・・」

・・・

断言ハデキヌガ、オソラク可能デアルト判断スル。」

「本当!？」

「患者ヲ診ネバ判断シカネル。ソノ患者トイウノハ主カ?見タトロ具合ハ悪クナイヨウダガ、ドコカ悪い箇所ガアルノカ?」

「私のお姉さまよ。小さい頃からずっと病気で、でも原因がわからないから治せなくて・・・」

「居ナクナレバ、淋シイカ?」

「当たり前じゃない!!」

「治レバ、嬉シイカ?」

「当然よ!!」

「ナレバ、最善ヲ尽クスト誓オウ。シカシ、先程モ言ツタガ治セルカドウカハ断言デキヌ。」

「本当！？ありがとう！！」

「礼ヲ言ワレル程ノコトデハナイ。加エテ、主ノ願イヲ叶エルノハ『サーヴァント』トシテ当然ノコトデアル。

シタガツテ、礼ハ不要デアル。」

「それでも良いの。ありがとう、希望をくれて。じゃあ、今度の虚無の曜日に私の家に一緒に来て。」

「承知^{イエス、}シタ、我が主^{マイ・ロード}ヨ。」

SIDE…ハサン

原因不明ノ病氣ネエ。

考エラレルトシテ、マズハ癌カ、新種アルイハ未知ノウいるす疾患。

万一、免疫不全ダトシタラ抵抗力ガ下ガツテ厄介ダナ。

俺等ガるいずノ家ニ着クマデニ死ンデナキヤ良イガ・・・

ソレニシテモ、受肉シテルトハ思ワナカッタゼ。

霊体化デキタラ、アチコチ自由ニ行ケテ便利ダッタндаガ、

暗殺者ノ固有すぎるガアルカラ何トカナルダロ。

召喚した晩（後書き）

ハサン自体が複数人のハサンの集合体で、

F a t eとZ E R O（第5次と第4次）の時とで宝具が違ってたのでハサンが変われば宝具も変わると思ってたオリジナル宝具です。

チートっぷりは極力抑えますが、

この宝具を考えた時点で十分チートなんだろうな・・・

それにしても、会話しか書いてない。というか、書けないorz

翌朝、授業

ゆさゆさ。

「主ヨ、朝ダ。目覚メラレヨ。」

「……ん？　っきゃあああああつ！！」

「起キラレタカ、我が主。朝カラ大声ヲ出シテハ迷惑デアロウ？
モウ少シ、静カニ起キラレヨ。」

「だ、だ、だ、誰よ、アンタ！？」

「忘レラレタカ、主ヨ？」

昨日、主従ノ契約ヲ結ンダデアロウ。

我が名ヲ忘レタノデアレバ、モウ一度名乗ルガ？」

「いや、思い出したわ。朝から貴方の顔を見ると、眠気も吹き飛ぶわね……」

「目覚メラレタヨウデ何ヨリ。ソレヨリモ、ソロソロ朝ゴハンヲ食サヌト、授業中ニ眠クナル。急ガレヨ。」

「そうね。それじゃ、急いで着替えて食堂に向かいましょう。ところで、ハサンは食事するの？」

がさこそ。シユル。がさがさ。

「2日程度ナラ、食事シナクテモ活動ハ可能デアル。

一緒ニ食堂ニ行ッテモ良イガ、昨日ノ他ノ者ドモノ反応ヲ見ル限り、我ハ食堂ニ行カヌ方ガ良イト判断スル。

従ッテ、近クノ森デ何カ食ベラレル物ヲ探シテ食ベルコトニスル。」

ギイ。ガチャ。

「・・・たしかに、怖がって朝食どころじゃないわね。

じゃあ、厨房に頼んでおくから厨房で何か貰いなさい。」

ボタン。ガチャリ。

「感謝スル。」

「お姉さまの病気が治るかもしれないんだもの。これくらいお安い御用よ。

でも、厨房の人達を驚かせちゃダメよ。」

「・・・ナラバ、宝具ノ使用許可ヲ頂キタイ。

我ハ変装ト擬装ニ特化シタ存在^{モノ}ユエ、宝具ヲ使用スレバ勝手ニ拝借スルコトモ可能トナル。

モットモ、長時間ノ変装ハデキヌガ。」

「んゝ。厨房のみんなには悪いけど、他の人にもハサンに慣れてもらいたいし。

でも、ハサンが必要だと判断したら使用しなさい。

貴方だって、必要以上に怖がらせたくはないでしょう？」

「怖ガラセタイワケデハナイ。我ヲ信用シテクレタコトニ礼ヲ言ウ。

」

「使い魔である貴方の言葉に耳を傾け判断するのは、主人である私の役目よ。」

礼は言わなくていいわ。」

「食事ノ後ハ何処ニ行ケバ良イ？タシカ、使い魔ト共ニ教室ニ向カウヨウニ指示ガアツタハズダ。」

「教室なんだけど・・・」

あ、シエスタ~~~~~。」

「! ! はい、なん・・・で・・・しょうか・・・」

ミ・・・ミス・ヴァリエール。」

「怖がらなくていいわ。この子は私の使い魔なの。」

見た目は確かにアレだけど、本当は優しいのよ（たぶん）。」

「（ほっ）使い魔でしたか。ミス・ヴァリエール、御用事は何でしょうか？」

「この子を厨房に連れて行って何か食べさせてあげて。」

食事が終わったら、私の教室まで連れてきてちょうだい。

頼めるかしら？」

「はい、わかりました。」

「それじゃ、ハサン。後でね。」

「了解シタ、我が主ヨ。」

「ハサンさんというのですね。私はこの学園でメイドをしているシエスタといいます。

ミズ・ヴァリエールのお言いつけですので、厨房までご案内しますね。」

「感謝スル、女中殿。」

この後、厨房に向かうまで皆様をびじらせ、厨房の皆を恐怖のどん底に落としながらハシバミ草のサラダを美味しく食べました。

朝食を終わった後ルイズとハサンは教室に居た。しばらくして教室のドアが開き、

「さて進級おめでとう皆さん。皆さんどんな使い魔を召喚したか見せて下さいな」

少し小太りの女性が言い、教室を見渡し、やがてルイズに視線が止まった。

「ミ・・・ミス・ヴァリエールは、その・・・ずいぶんというか、かなり珍しい使い魔を召喚したのですね・・・」

悪魔なんて初めてですわ。と言ったとたん周囲がざわめいた。

「先生。ヴァリエールは異端のようです。悪魔を召喚したなんて聞いたことがない!!!」

その言葉に怒るルイズ。

「先生、『風邪っぴき』のマルコリヌが侮辱しました!!」

「誰が『風邪っぴき』だ。僕は『風上』のマルコリヌだ!!」

「五月蠅いわね。あなたがそんな鼻声だから『風邪っぴき』なのよ。」

「なんだと『ゼロ』のルイズが！」

ポンポン。手を叩いた音が聞こえた。そこにはシュヴルーズが、にこやかな笑みを浮かべていた。

「皆さん仲良くするのはいいですが、級友と喧嘩してはいけません」
トントン。肩を叩かれたので、そっちを向くと、

（主ヨ。アレヲ殺シテモ良イカ？）

（なっ。良いわけないじゃない。）

（シカシ、我が主ヲ侮辱シタ。ソノ罪ハ万死ニ値スル。）

（・・・確かに侮辱されたけど、殺す程のことじゃないわよ。）

（主ガソウ言ウノデアレバ、今回ハ止メテオコウ。）

（そうそう、止めなさい。殺す価値もないわ。）

（確カニ。アノ程度デアレバ、何時デモ殺セル。殺シタクナッタラ、殺害命令ヲ出サレヨ。）

(出さないわよ!! たぶん・・・)

「先生。『ゼロ』のルイズは本当の事で・・・もがっ・・・」

「これ以上言う方には、もれなく口に粘土をさしあげますが、よろしいですね?」

答えは聞かないけど。そう言って笑うと、

「改めて授業を始めます。まずは一年生からの簡単な復習からにいたしましょう。」

土の呪文『練金』は物質を変える魔法です。例えばこの石。」

懷から石を取り出して教壇に置く。

「見ていて下さい。これが『練金』です。」

石に向かって杖を振ると、

「先生、それは金ですか!?!」

キュルケが声を上げた。

「いいえ真鍮です。私はトライアングルなので金を作ることは不可能です。」

土のスクウェアであれば可能ですが。と付け加える。

「では、誰かにやっていただきますしょう。」

そうね、ミス・ヴァリエール。やってみてください。」

その言葉に、教室中がどよめく。

「先生、ミス・ヴァリエールだけは止めた方が良いかと。」

「そうだそうだ。また、爆発するのがオチだ!!」

「皆さん、そんなに言うものではありません。皆さんも最初から成功した人は少ないはずです。」

それに、やる前から失敗と決め付けるのは大変失礼なことですよ?」

「私、やるわ。」

「その意気です、ミス・ヴァリエール。では、教壇へ。」

またも、懷から石を取り出して教壇に置く。

一部の生徒は避難を始めた。ルイズを見ているのは、ハサン以外は数人だけ。

そして、ルイズが石に向かって杖を振ると・・・

ドカアアアアアアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!!!!!

教室が吹き飛んだ。

SIDE..ハサン

オイオイ、マジカ?アレノドコガ失敗ナンダヨ。

魔術ハ、シツカリ発動シテルジャネエカ。

普通、魔術ツテ失敗シタラ何モ起キナインジャネエノカヨ。

ソレニシテモ、コノ破壊力ハ凄マジイナ。

翌朝〽授業（後書き）

お気に入りに登録してくれた方に感謝。
今回はネタにリユタロス。

授業中断〜決闘直前

ルイズの魔法で爆発したため授業中断後、
ルイズは罰として教室を片付けるよう、命じられたので
ハサンと2人で片づけをしていた。

「主ヨ、先程ノ『爆発』ノ魔術ハ見事ダツタ。
アレ程ノ爆発ノ使イ手ハ、ナカナカ居おラヌゾ。」

「何よそれ。嫌味？片づけが嫌なら、1人でどっかに行きなさいよ
！！」

「ソウデハナイ。純粹ニ褒メテオル。」

「それが嫌味だって言うのよ！！魔法は失敗だったのよ！！」

「マズハ落チ着カレヨ。ナラバ問ウガ、コノ世界デハ魔術ニ失敗ス
ルト爆発スルノカ？」

「・・・普通は、何も起きないわね。」

「ソウデアロウ？ナラバ、アノ魔術ハ成功シテイルコトニナル。
シカシ、實際ハ爆発トイウ結果ガ起キタ。

我ノ憶測ニ過ギヌガ、仮説ヲ立テテミタ。

タシカニ、『鍊金』トシテハ失敗カモシレヌガ、魔術自体ハ成功シ
テイル。

ツマリ、無数ニアル物質ヲ作り変エルトイウ観点ノ1ツデアル
破壊トイウ観点デ見レバ、疑ウ余地モ無ク成功シタト言エル。
ココマデハ良イカ？」

「・・・続けて。」

「我ノ居タ世界デハ、『鍊金』ハ『理解』、『分解』、ソシテ『再構築』ノ

3ツノ過程カラ成ルトサレテイル。

主ノ『鍊金』ハ【何カガ原因デ『再構築』マデ行ワレズ、『分解』ノ過程デ止マツテシマッタ。】

トイウノガ、我ノ見解ダ。」

「そういう説ははじめて聞いたわ。けれど、なかなか興味深い話ね。

『鍊金』についてはそれで合ってるかもしれないけど、他の呪文でも爆発するのよ？

それについては？」

「フム・・・。コノ世界デハ、『爆発』サセルヨウナ属性ノ魔術ハ存在シナイノカ？」

「地・火・風・水の4系統の魔法しか無いわよ。

火のスクウェアなら出来るかもしれないけど、爆発だけの系統は無いわ。」

「ソレハ確カカ？」

「あとは虚無くらいだけど、虚無は伝説の魔法系統だし。」

「ナラバ、主ノ系統ハ『虚無』ナノデアロウ。」

「！！アンタ、聞いてなかったの！？虚無は伝説の系統なのよ？」

私みたいな失敗ばかりの魔法使いに使えるわけじゃない。」

「コレマデニ得ラレタ情報ヲ整理スルニ、
コノ世界ノ魔法ハ地・火・風・水・虚無ノ5系統ノウチ、
イズレカニ分類サレルト判断スル。
地・火・風・水デナイノナラバ、残ルハ虚無ダケダ。
違ウカ？」

「っ。たしかに、筋は通るわね。」

「魔力ハアルガ、魔術ガ使エナイ。トナレバ、虚無ノ系統ハ他ノ4
系統ヲ無効ニスルノカモシレヌ。」

トリアエズ、理解シテイタダケタヨウデ何ヨリダ。サア、掃除ヲ再
開シヨウ。

我ハ宝具ヲ使用スルト、遅レヲ取り戻セルト判断スル。」

「そうね、魔法を使うな。と言われたのは私だけだし、宝具の使用
を許可するわ。」

ちようど良い機会だから見せてよ。

でもね、一々私の許可を取る必要は無いわ。」

「了解シタ、^{イエス}我が主^{マイ・ロード}ヨ。『妄想変身^{ザバーニヤ}』！！」

プシュ~~~~~

「あんまり変わってないわよ？　というか、少し小さくなってない？」

「分身ハ2回宝具ヲ使用スル必要ガアル。『妄想分身^{ザバーニヤ}』！！」

ポッポポポポポポポポポポポポポポポボン！！

「そうねえ、それじゃ図書館に行くわよ。ついてきなさい。」

そして図書館に向かう途中・・・

「あら？ハサン、少し待っててね。ミスタ・グラモン、落としたわよ。」

「いや、それは僕のではない」

「でも、ギーシュ、たしかに貴方のポケットから落ちたわよ？
それとも、貴方のポケットには、貴方の私物以外の物が飛び込むのかしら？」

「おや？それはモンモランシーの香水じゃないか！
確か・・・特別な相手にしか調合しないとか何とか言ってたっけ。
ギーシュ、ひよつとしてモンモランシーと」

「ギーシュ様・・・あの時、僕の想いは君だけに。と言って下さったのは、嘘だったのですね・・・」

「ケ、ケティこれは・・・違うんだ。」

パァン！！ギーシュの言い訳を、びんたが遮る。

ギーシュは身体的ダメージを受けた。効果はバツグンだ。

「さようなら」

「ギーシュ、今のは誰かしら？」

「なんだい？今僕は・・・」

「今僕は・・・？何なのかしら？」

「モ、モンモラシー。これは誤解だ！！」

「何が、僕の心は君に釘付けだ、よ。最低！！」

立ち去って行くモンモラシーを見つめるギーシュ。

ギーシュは精神的ダメージを受けた。効果はバツグンだ。

「ギ、ギーシュ。そのう、なんだ。」

「いやいい。彼女たちはただ、薔薇の意味をわかっていなかっただけなんだよ。」

薔薇は多くの女性に愛されなくては意味がないものさ。」

ルイズは馬鹿馬鹿しくなって、ハサンと一緒に図書館に向かおうとした。

「待ちたまえ。」

後ろからギーシュに呼び止められる。

「何よ？」

「君の不躰な行為で二人の女性が傷ついたじゃないか。どうしてくれるんだ。」

「貴方が二股を掛けたのが原因でしょ？私は悪くないわ。」

そうだそうだと声が挙がる。

「ミス・ヴァリエール。君が傷つけた女性に謝りたまえ。」

「ならば、謝罪すべきはその女性に。であるべきですわね。

でも、悪いのは二股を掛けた貴方ではなくて。ミスタ・グラモン？」

「五月蠅い。だったら決闘だ！！」

「おい、ギーシュ。貴族同士の決闘は校則違反だぞ。」

「う、五月蠅い。そうだ、止めなかった使い魔が悪いんだ。

うん、きつとそうだ。そうに決まってる。」

「ギーシュ、貴方ね・・・」

「我ニ戦闘ヲ挑ムカ、ヨカロウ。我が主ヲ愚弄シタ罪、死ヲモツテ贖エ。」

「ハサン、止めなさい！！ギーシュも。アンタ殺されるわよ？」

「脅したって無駄さ。ヴェストリの広場に来い。」

SIDE..ハサン

貴族ツテノハ、ナンデコウモ自分ノ非ヲ認メタガラナイ奴ガ多イン
ダ？

俺ニ勝ッタトコロデ、二股ノ事実ガ消エルワケジャナカロウニ。
マ、良イ機会ダ。アノ小僧ヲ潰シテオケバ、

ルイズヲ馬鹿ニスル奴モ滅ルダロ。
アア、ナンテ主人思イナンド。

授業中断〜決闘直前（後書き）

書いてて思ったのが、ハサンの片言やりづらいのに多い・・・
「妄想変身」させて、そのまま放置しようかな・・・

今回のネタは 鋼の錬金術師&黒執事。

決闘

「ヴェストリの広場」

「諸君、決闘だ。」

ギーシュと悪魔が決闘するぞ。とか、悪魔が決闘のルールを知っているのか。とか

色々失礼なセリフが聞こえてくるが、意識的に無視する。

「ハサン、たしかにアンタなら楽勝でしょうけど、そんな弱い者イジメしたって仕方ないでしょ？」

ねがていぶ
「否定だ、主ヨ。」

我がコレカラ行ウノハ、指導デアル。」

「指導って何を指導するのよ？」

「後デ説明スル。」

トキニ主ヨ、松・竹・梅ノドレガ好きダ？
意味ガ分カラナイナラ、太陽・月・星デ答エテイタダキタイ。」

「????」

太陽かしら。」

「了解シタ。9割9分9厘9毛9糸9惣9微9纖9沙殺シデ勘弁シテヤロウ。」

「殺しちゃダメ!!」

「ソウ言ウト思ツタノデ、1沙ダケ生カスツモリデアル」

「だいたい、1しゃ（？）生きてるって、どんな状態なのよ!？」

「具体的ニ言ウト、呼吸ヲシテイルノガ奇跡ナ状態ダ。」

「月や星だったらどうなるのよ?」

「月ダト6割6分6厘6毛6糸6惣殺シダナ。」

星ハ3割3分3厘殺シダ。説明スルト、ソレゾレ

全身カラ折レタ骨ガ皮膚ヲ突キ破ツテ見エテイル状態
ト
手足ノ関節ガアリエナイ方向ニ曲ガツテイル状態ダナ。」

「十分にやりすぎよ!！」

「アレハ、授業中モ主ヲ笑ツテイタコトヲ確認シテアル。

我ダケナラ構ワヌガ、主ヲ侮辱スルトナレバ話ハ別ダ。

主ノ誇リヲ守ルタメナラ、我ハ手段ヲ選バヌ所存ダ。」

「／／／（じゃなくて、）

なんでアンタみたいなのが、そこまで私に尽くすのよ。

ハサンの方が私よりも凄いじゃない。」

「ソレモ後デ説明シヨウ。ドノ程度ナラ構ワヌノダ?」

「あんまり酷い大怪我をさせないようにね。それだけは言っておくわ。」

「了解シタ、我が主ヨ。全力デ手加減シヨウ。」

「おいしい、作戦会議はもういいかね？」

ギャラリーの皆が待ちくたびれているのだが？
それとも、僕に謝るかい？」

「イヤ、許可ヲ貰ツタ。イツデモ構ワヌ。」

「土のメイジ、『青銅』のギーシュ、いざ参る。行け、僕の可愛い乙女よ。」

「ごーれむ使イカ。ナラバ『妄想変身』^{ザバーニヤ}！！」

プシュ~~~~~

ハサンの姿が煙に包まれる。

「目くらましか！でも、そんな手は通用しない。
^{ワルキューレ}戦乙女、突撃だ。」

「あらあら、誰が目くらましだなんて言ったかしら？」

煙が晴れると、紫の髪をした女性が居た。

「！！女性の悪魔だったのか！？」

「坊や、女性に悪魔は失礼よ？少し、お仕置きしてあげなくちゃね。
・・・迎え撃ちなさい、竜牙兵。」

謎の女が何かをまくと、地面から奇妙な骨で構成された兵が立ち上がり

戦乙女に向かって攻撃を開始する。

「だったら、戦乙女！！全員で攻撃だ。」

ギーシュの手にある薔薇の花弁が散ると、6体の戦乙女現われ、合計7体の戦乙女が竜牙兵に向かって攻撃を開始する。

「ダメよ、坊や。女の子にはもっと優しくなさい。」

／＼／

「でもね、油断してちゃ、もっとダメよ。竜牙兵！！」

その声に反応するかのように、竜牙兵が腕を振ると・・・

パッキーーーーーーン！！

小気味良い音がして、7体の戦乙女が全て上半身と下半身に分かれた。

「！！なっ、なんだってええええっ！？」

「坊やの攻撃はこれで終わりかしら？だったら、次は私の番ね？」

そう言うと、何かをつぶやき始めた。と、同時に空が暗くなり、いくつもの魔方阵が現れる。

「死にたくなければ、5秒以内にそこから10メートル以上離れなさい。」

「ひいっ!!」

慌てて走り出すギーシュ。そして体感時間で宣言された倍の10秒が経過した時

バリバリバリッ!!

決闘開始時にギーシュが居た場所に雷が降り始めた。

「さて、坊や。私の力は分かっていただけだと思うけど、まだ続けるかしら？」

と、ギーシュの方を向くと、言われた当のギーシュは失神している。

「これでは、戦闘続行は不可能ね。皆さん、私の勝ちで良いかしら？」

と、問いかけると、見ていた皆は顔を青くして縦に振っている。

「そうそう、言い忘れるところだったわ。」

と、皆を見渡すと

「これから先、私の主人である、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールを侮辱した者は・・・」

そういつて、雷が落ちた場所を指差すと

「あの程度では済まさないから、そのおつもりで。」

そこには、幅5メートル深さ20メートルはあろうかという穴があいていた。

「デハ行コウ、主ヨ。触媒採集ト説明、ドツチガイイ？」

いつの間にか、いつもの暗殺者スタイルになったハサンがルイズを促す。

「え・・・あ・・・、説明にしてもらおうわ。部屋に戻るわよ。」

ルイズ以外の皆は、自分が見たことが信じられなさすぎて、様子を見に来たコルベールが声を掛けるまで立ち尽くしていたという。

決闘（後書き）

感想で『鍊金』についてご指摘いただきました。

この場で説明させていただくと、

鍊金の理論については、型月よりハガレンの方が理屈にあっている（というか、ルイズの失敗を分かりやすく説明しやすい）
と思ったので、ハガレン理論を採用しました。

ちなみに、『紫の髪の女性』はもちろんキャス子さんです。

他にもゴーレムっぽいのを出せそうな人が居たんですが、

（というか、考えてたんですが）

色々あって止めました。

ハサンの誰かが会ったことがあるオリ設定でも良かったかな・・・

決闘—Other Side—

SIDE…オールド・オスマン

ワシが何時ものように使い魔を使ってミス・ロングビルのスカートを覗いていると・・・

ダダダダダッ！！

「失礼します、オールド・オスマン！！」

大至急、見ていただきたいものがあるのですが！！」

「なんじゃね、ツルツパゲール君？騒々しいぞ。」

「私の名前はツルツパゲールではなく、コルベールで・・・
って、それどころじゃありません！！

こちらを見てください！！」

「何々？『始祖と使い魔』。

コッパゲール君、この本は持ち出し禁止ではないか。
君、来月減給じゃ。で、この本がどうしたのかの？」

「お叱りは後で。あと、コッパゲールではなくコルベールです。
それと、減給は勘弁してください。」

「ふむ、冗談はこの辺にしておこうかの。あと、減給はするからの。」

そういうと、ミス・ロングビルに目で退室を促す。

もう少し下着を覗いていたかったが、目の前のハゲール君の様子がただ事ではない。

おそらく、かなり重要なことなのじゃろう。

「（涙）このページをご覧ください。」

「ふむ、『ガンダールヴ』のルーンじゃな。これがどうしたのじゃ？」

「こちらもご覧ください。これはこの春にある生徒が召喚した使い魔に刻まれたルーンです。」

そう言うのと、懷から出した紙には・・・

「ふむ、似ておるの。」

「過去の例を紐解くと、似たようなルーンには似たような力が宿ることが多いです。」

これはきつと『ガンダールヴ』のルーンです。」

「まだ『ガンダールヴ』と決まったわけではないが、この事は他言無用じゃ。よいな？」

さっそく王宮に連絡を。と騒ぐハゲに釘を刺す。

「なぜですか？虚無の再来の可能性があるんですよ!？」

「仮に、虚無が再来し『ガンダールヴ』が召喚されたとしよう。それが王宮に伝われば、王宮の者どもは虚無を戦争に加えようとするじゃろう。」

なにせ、『伝説の系統』と『その使い魔』なのじゃのからな。

しかもじゃ、聞けば虚無と目されておるのは生徒というではないか。ワシ等教職にある者の役目は何じゃ？

生徒達を教え、守り、間違った方向に進むのを止めるのがワシ等教職にある者の役目ではないのかの？」

今のは決まったか？目の前のハゲが震えだしたぞw

「その通りです。申し訳ありませんでした、オールド・オスマン。」

「分かればいいのじゃ、この件はくれぐれも他言無用じゃ。

あと、来月は減給じゃからの。」

「そ、そんなぁ・・・」

「生徒の規範たる教師が規則を破って、咎められなければ、真似をする生徒も出てこよう。

そうなれば、規則など有って無いようなものじゃ。

それに、ワシは言ったはずじゃぞ？

『生徒達を教え、守り、間違った方向に進むのを止めるのがワシ等教職にある者の役目ではないのかの？』と。

それを認めたのは他ならぬ君自身じゃ。」

ダダダダダダッ！！

ふむ、今度は誰かの？今日は騒々しいのう。

「失礼します、オールドオスマン！！大至急、眠りの鐘の使用許可を！！」

「なんじゃね、ビター君。いったい、どうしたというのじゃ？」

「いえ、私はビターではなくギトーです。それに私はミルクチョコ
レートの方が・・・

って、そうではなく。決闘ですよ、決闘。」

コルベール君と同じ反応じゃの、つまらん。

「それは穏やかではないの。誰と誰が戦うのかね？」

「ミスタ・グラモンと、ミス・ヴァリエールの使い魔です。」

「貴族と使い魔の決闘？放っておきなさい。」

「ですが！！！」

「この学園の最高責任者は誰かの、ギター君？」

「オールド・オスマンです。」

楽器の方はスルーかいw

「そうワシじゃ。そのワシが良いと言っておるのじゃ。放っておきなさい。」

「しかし、ミス・ヴァリエールの使い魔は悪魔ということですよ！！」

「しかし、使い魔なのじゃろう？使い魔であれば、主の言いつけには背けぬよ。

まして、それが契約を重視する悪魔であれば尚更じゃ。

話はそれだけかの？ならば、出て行くがよい。
ワシはコルベール君と話がある。」

わかりました。と、退室したギトー君が居なくなったのを確認すると、

「で、虚無と目されておるのは誰じゃ？」

「はあ、それが・・・」

今の報告にあったミス・ヴァリエールなのです。」

「！！」

じゃったら、少し様子を見る必要があるのう。」

水晶を引き寄せると、中には黒衣の何かと金髪が対峙している風景が映し出された。

「ふむ、まだ始まってはおらぬようじゃな。」

金髪がゴーレムを出すと、黒衣は煙に包まれた。

煙が晴れると、別人に成っておるではないか。

黒衣だった者が何かをすると、地面から骨製のゴーレムが現れる。

それを見た金髪がゴーレムを7体まで増やす。

と、骨のゴーレムが金髪の作ったゴーレムを斬り裂いた。

「「なっ！？」」

と、今度は空から雷が雨よ霰よと降りまくる。

「「なんっじゃ、こりゃあああああああつ！？」」

と、終わったようじゃな。後ろに居るコルベール君に

「ワシは、カルシウムで金属を斬るのは不可能じゃと思っていたのじゃが、

君はどう思う？」

「奇遇ですね。私もそう思っていました。」

「あれが『ガンダールヴ』の能力かの？」

「いえ、伝説では『ガンダールヴ』はあらゆる武器を使っていたとされています。」

「ということは、少なくとも手はあったようじゃな・・・」

「ええ。魔法が使えた、とは記録に残っていませんでしたが・・・」

「コルベール君。重ねて言うが、
虚無の件、そして『ガンダールヴ』の件はくれぐれも他言無用じゃぞ。」

「了解しました、オールド・オスマン。」

「それとな、固まって動けなくなっておる生徒達をそれぞれの自室に戻しなさい。」

あのままじゃと、一晩中あそこで固まったままじゃぞ。」

「わかりました、オールド・オスマン。では、失礼しました。」

水晶を片付け、考える。

詠唱無しにゴーレムを作成するのはともかく、あれだけの量の雷をあれだけの短時間で降らすとは、

あの使い魔は、いったい何者じゃ？

あのような存在が、万が一でも戦争に加わるようなことがあれば・

・
と思うと、ゾツとするわい。

決闘終了後

—ルイズの自室

「ここなら良いでしょ。それじゃ、説明してもらおうわよ。」

「何カラ説明スレバ良イ？」

「じゃあ、私の質問に答えなさい。」

最初は、そうね。貴方が言っていた指導についてよ。」

「指導トハ、明確ナ理由デ以ッテ相手ヲ導クコトダ。」

「私が聞いているのはそうじゃなくて!!」

「マア、待テ主ヨ。話ハ最後マデ聞クモノダ。」

我が指導シタノハ、アノ場ニ居タ者全員ダ。

内容ハ、見タ目デ相手ヲ判断スルト危険ダトイウコト。

特ニ、魔術ガ絶対ダト思ッテイルヨウナ輩ハ

自信過剰トナリ、ソノ結果、思ワヌトコロデ命ヲ落トスコトサエアル。

シカシ、優シイ主ノコトダ。ソレハ望ムトコロデハアルマイ。

勝手ニ死ヌノハ、我ノ関知スルトコロデハナイガ、

主ガ悲シムノハ我ノ望ムトコロデハナイ。

故ニ危険、特ニ生死ヲ知ッテモラウタメニ決闘ヲ受ケタ。

モットモ、我デスラ、アノ小僧程度デアレバ魔術ヲ無効ニスル手段

ヲ幾ツカ知ッテオルゾ？

我が負ケル要素ハ皆無ダ。」

「魔法を無効にするって、どうやって!？」

「色々アルガ、簡単ナノハ『結界』ダナ。」

ガサゴソ

「我ハ常ニ、コノヨウナ短剣ヲ所持シテイル。

コレヲヲアル法則ノモト、5本ホド地ニ刺スダケデ簡単ナ結界ニ成
リエル。」

「見たところ、普通の短剣見たいんだけど、そういうものの?
ハサンだったら何でもありみたいない気はしてたけど、本当にアンタ
ってデタラメね。

次の質問よ。どうして、そこまで私に従うの?」

「『使イ魔召喚ノ儀式』ハ、呼び出シタ者ニ相応シイ存在ヲ召喚ス
ル儀式ナノダロウ?」

「そうよ。いえ、だからこそその疑問よ。
どう考えたって、私に貴方が相応しいとは思えないもの。」

「心外ダナ。ソレデハマルデ、我ガ主ニ相応シクナイヨウデハナイ
カ。」

「実際、その通りじゃない。

私はろくに魔法も使えない、認めたくないけど落ちこぼれよ?
貴方みたいな凄いい使い魔を使えるわけじゃないじゃない。」

「ソレハ違ウゾ、主ヨ。我ダカラコソ、主ニ相応シイノダ。」

「なんでよ？」

「以前モ話シタガ、我が名『ハサン・ザーバツハ』ハカツテ『ハサン』ト呼バレタ複数ノ存在ノ集合体ヲ指ス名称ダ。故ニ、我ハ確タル我ヲ持タヌ。

言ッテシマエバ、我ハ我デアリナガラ我デハナイ。

我ハ我等ノ中デモ、特異ナ存在トイエル。

我ハナ、我が我デアル証、確タル我が欲シイノダ。」

「・・・」

「我が認メラレルトイウノハ、『ハサン・ザーバツハ』トシテ認メラレルトイウコトダ。

言イ換エレバ、我個人デハナク我が属スル集団ヲ認メルヨウナモノダ。

我が認メラレレバ認メラレルダケ、我デハナク我等ヲ認メルコトニナル。

我が我デアロウトスレバスルダケ、我ハ我カラ遠ザカル。

我ハソウイウ矛盾シタ存在ナノダ。

ソウイツタ意味デハ、主ト我ハヨク似テイル。」

「・・・」

「主ガ魔術ヲ使エバ使ウダケ、魔術トシテ成功シテイテモ失敗ダト言ワレル。

主ノ系統デアロウ『虚無』トハ謂ワバ、『無ガ存在スルトイウコト』。

コレ程『矛盾』シタ事ハ有ルマイ？

ツマリ、主ト我ハ『矛盾』デ繋がツタ似タ存在ナノダ。

『使イ魔召喚ノ儀式』デ異世界カラ我ヲ呼び出セタノハ

オソラク、コノ世界ニハ主ガ主デアルタメニ相応シイ者が存在シナ
カッタ為デアロウ。

ソウデナクテハ、我ヲ召喚スルコトナド通常ハ不可能ナノダカラナ。
他ニ尋ネタイコトハ無イカ？」

「貴方がギーシュと戦った時に変身していた女は誰？
かなり高位の魔法を使っていたみたいだけど、あれは何？」

「順ニ説明シヨウ。

アノ女ハ、我ガ居タ世界ニ存在シタ、我ガ知ル限り最モ優レタ魔術
師ノ1人ダ。

『わるきゅ〜れ』ト言ツタカ？アノ小僧ガ出シタごーれむニ対抗ス
ルノニ

相応シイ魔術ヲ使用デキルノデ、アノ者ヲ借りタ。

ソノ後ノ雷モ、アノ者ノ魔術ダ。」

モットモ、今ハ失ワレタ古代ノ魔法ダガナ。と付け加える。そして、

「補足シテオクト、主ノ姉ヲ治セル可能性ヲ持ツ存在ノ1人デモア
ル。」

「1人ってことは、まだ他にも居るの！？」

「可能性ダケナラ、幾ツカ候補ガアル。

少ナクトモ、コト魔具・薬品ノ作成ニ関シテ、アノ者ヲ上回ル存在
ヲ我ハ知ラヌ。

アノ者ハ、ソウイウ存在ダ。」

「いったい、何者なのよ・・・」

「『裏切りノ魔女』トイウノガ、アノ者ノ二ツ名ダ。」

「裏切っちゃダメエエエ!!」

「『裏切りノ魔女』と呼バレルノニハ訳ガアツテナ。

マズ、父親ニ裏切ラレタノデ自分ノ弟ヲ殺シ、

夫ノ叔父ニ裏切ラレタノデ、夫ノ叔父ヲ殺シ、

最後ニハ夫ニ裏切ラレタノデ、夫ノ結婚相手ト自ラノ子ヲ殺シタノ
ダ。

ドレモ、先ニ裏切ッタノハ相手ダ。自ラ裏切ッタワケデハナイ。

従ッテ、裏切ラナケレバ契約ヲ守ル者ダと思ワレル。」

「約束を守ればいいのね。それだったら簡単だわ。」

S I D E ..ハサン

簡単ニ「約束ヲ守ル」ト言ウガナ、主ヨ。

約束ヲ守ルトイウノハ、ソシナニ簡単ナモノジャナイゾ?

人ハ知ッテカ知ラズカ、嘘ヲツク。

嘘ヲツケバ、不文ノ約束デアル

【『相手ヲ信用スル』トイウ約束】ヲ守レナカッタ事ニナルノダゾ?

ソレニ、人ハ夢ノ如ク儚イ。約束ハ難^{カタ}ク、裏切^{ヤス}リハ易イ。

モットモ、ソノ儚イノニ、誰ヨリモ強クアロウトスル主ヲ守ルタメ

ニ俺ガ居ルノカモナ・・・

決闘終了後（後書き）

知らない間に、こんな会話分だらけの駄作を

お気に入り登録してくれた人が20人になっていました。

この場をお借りして、読者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

また、ここはこうした方が良いなどのご意見等がございましたら感想に書いていただきたく、ここにお願ひ申し上げます。

決闘原案（没ネタ）（前書き）

気になった人が居るかもしれないので、
一応載せておこうかなって・・・

決闘原案（没ネタ）

梅コースⅡ星

暗殺者の固有スキル『気配遮断』を発動し、

背後から膝カックンして転ばせた後、砂で目潰し。

その後はハサンの気が済むまで、カウントダウンしながら

殴る・蹴る・投げる・極めるの各種暴行を加える。

週間少年チャンピオンに連載されている某格闘マンガにあった、

「人は待つ時間にこそ恐怖を覚える」というもの。

竹コースⅡ月

『妄想変身』するが、『妄想心音』の応用技『妄想人体（オリジナル宝具）』を発動させ、

カウントダウンしながら、骨を1本1本折っていく。

『妄想人体』により、週間少年ジャンプで連載されている某死神マンガにあった

「対象の臓器・骨を破壊する」をリアルな意味で再現することが可能。

松コースⅡ太陽

残虐すぎてお見せできませんコース。

やっぱりカウントダウンはする。

ハサンは暗殺者なので、苦痛を覚えるような事に対する知識は豊富です。

とだけ、書かせていただきます。

別名、週間少年サンデーで連載されている某格闘マンガにあった

「君が考えうる、限界の苦痛を考えたまえ。よし、考えたね？そんなものは天国だ！！」コース。

追記

お気づきかもしれませんが、うちのハサン氏はルイズが大好きです。
恋愛感情的な意味じゃありませんけどw

決闘原案（没ネタ）（後書き）

隠しネタも含めて、今までに出した元ネタが
全て分かる人とは仲良くやっていけそうです
W

ヴァリエール邸にて（前編）

ウルの月1日（虚無）

AM 6:00　ールイズの自室

ゆさゆさ。

「主ヨ、朝ダ。目覚メラレヨ。」

「くくくん？　つきやあああああつ！！」

「起キラレタカ、主ヨ。」

毎朝毎朝、朝カラ大声ヲ出シテハ迷惑デアロウ？

イイ加減ニ慣レテイタダキタイノダガ。」

「寝起きでハサンを見ると、本気で眠気も吹き飛ぶわね・・・」

「目覚メラレタヨウデ何ヨリダ。今日ハ主ノ実家ニムカウノデアロウ？」

「そうね。それじゃ、急いで着替えないと。」

がさがそ。シユル。ファサツ。がさがさ。

「じゃあ、急いで行きましょう。ヴァリエール領までは時間かかるわよ。」

「時間ガカカルノデアレバ、ドウヤツテ行クノダ？」

「ふっふっふん♪」

前以て、お母様に連絡しておいたの。
そうしたら、竜籠の使用許可が降りたわ。
まずは、トリスタニアに向かうわよ。」

「デハ、早速向カウトシヨウ。」

S I D E .. ハサン

竜籠ッテ何ダヨ、竜籠ッテ。

アレカ？ヒョットシテ、竜ガたく（タクシー）ッテンノカ？
聞イタ感ジデハ、高級ナノカ速イノカドッチカナンダロウガ、
ドッチナンダ？

S I D E .. O U T

A M 9 .. 1 5 ー トリスタニア竜籠乗り場 ー

「本当ニ竜ナノダナ。」

「すごいでしょ？」

「名前カラ勝手ニ想像シテイタガ、想像ヨリモ立派ダ。」

P M 0 .. 2 5 ー ヴァリエール邸玄関 ー

「ナカナカ、豪勢ナ家ダナ。」

「すごいでしょ。みんなにもハサンを紹介しなくちゃね。入って入

って。

お父様く、お母様く、ただいま戻りましたく。」

「お帰りなさい、ルイズ。そちらが、件の手紙にあった貴女の使い魔ですか？」

「そうなの。ハサン、お母様に挨拶して。」

「るいず殿ノ使イ魔ヲシテイル『ハサン』ト申ス。今後トモヨロシク。」

「たしかに見た目は怖そうですけど、中身はいい人みたいね。」

「でしょ、でしょ。」

「ハサンさんと言いましたね。娘を治すことはできますか？」

「確約ハ出来ヌガ、大抵ノ病デアレバ治セル可能性ハアル。
マズハ主ノ姉ヲ診テカラダ。」

「もっともな言い分です。では、こちらへ。
カトレアの部屋にご案内しますわ。」

P M O ∴ 3 0 ― ヴァリエール邸カトレアの私室 ―

「おかえりなさい、ルイズ。あら、そちらは？」

「ただいま、ちい姉さま。こちらはハサン。私の使い魔なの。」

「るいず殿ノ使イ魔ヲシテイル『ハサン』ト申ス。今日ハ主ノ命ニ
抛リ、

貴女ノ病ヲ治スタメニ参上シタ。

貴女ヲ治ス前ニ、診察ヲ行イタイノダガ、マズハ質問ニ答エテイタ
ダキタイ。

返答ニ嘘偽リガアツタ場合、治セルカドウカ分カラナクナル。

従ツテ、分カル範圍デ正直ニ答エテイタダキタイ。

分カラナケレバ、分カラナイデ良イ。」

「あらあら、素敵な使い魔さんね。何について答えればよいのかし
ら？」

「ソウダナ、今ハドノヨウナ状態ダ？」

「そうねえ、体が重くて、熱っぽい感じがしら。」

「ソノヨウナ症状ハ何時カラ続イテイル？」

「小さい頃からよ。たぶん、2、3歳ころからかしら。」

「ソレヨリ以前ニ、何カ怪我ヲシタ事ハ？アルイハ病氣デモカマワ
ヌ。」

「1歳頃に1週間ほど熱があつたらしいわ。詳しい事は知らないけ
ど、治った後は外で遊んでいたらしいわ。」

「顔ハヤヤ白い。眼ヲ診セテ・・・結構ダ。

次ハ口ヲ大キク開ケテ・・・モウイイ。」

「ハサン、どう？治る？」

「コノ症状ナラ、心当たりガアル。」

「本当!？」

「確定シタ訳デハナイガナ。トコロデ、次ハ少シ血ヲ診セテモライタイノデ、

傷ツケルコトニナルガ良イカ?

指先カ耳タブニ少シ、傷ヲ付ケルダケダ。

傷ガ残ルコトハナイダロウカラ心配シナクテイイ。

ソウ殺気ダツナ、手元ガ狂ウ。」

「どうぞ。」

「デハ、失礼スル。アア、言イ忘レタガ止血ハシナイデクレ。ソレモ診断ニ必要ナコトダ。」

「ふふっ、変わった診察なのね。」

「我ノ居タ場所デハ、普通ノコトナノダガ・・・?」

「モウ少シデ終ワル。次ハ服ヲ脱イデクレ。」

「アンタ、何言ッてんのよおおおっ!!」

「????主ヨ、何ヲ怒ッテイル?

!

ヤマシイ気持チハ、全ク無イゾ。」

「そうよ、ルイズ。私を治そうとしてくれているんですもの。」

ハサンさんを疑うのは良くないわ。診断に必要なことなのでしょう？」

「ソウイウ事ダ。理解が早クテ助カル。

ココハ痛クナイカ？フム、デハココハ？ココハドウダ？」

・
・
・

「止血時間が約6分、凝固時間が約11分。正常トシタモノカ。」

「どう？なにか分かったの？」

「最後ダ。『妄想変身』！！」

ぷしゅ~~~~~

「姿が変わった？面白い使い魔さんね。」

「『同調開始』」

・・・（赤血球数正常、ヘモグロビン機能異常）

・・・（白血球数正常、免疫機能正常）

・・・（血小板数正常、血液凝固機能正常）

『同調終了』」

「どうだった？」

ぷしゅ~~~~~

「想像シテイタモノヨリハ、ハルカニましダガ、結論カラ言ウト『完治』ハ不可能ダ。」

「そんな!?!?なんで、どうしてよ!?!?」

「落ち着ケ、主ヨ。我ハ最善ヲ尽クスト誓ツタハズダゾ。
ソレニ、症状ノ改善ハ可能ダ。」

「どういう事?」

「説明セネバナルマイナ。フム、主ヨ。
申シ訳ナイガ、家族ヲココニ集メテモラエマイカ?」

ヴァリエール邸にて（後編）

ウルの月1日（虚無）

P M 3 ∴ 2 5 ーヴァリエール邸カトレアの私室ー

「カトレア嬢ノ病氣ニツイテダガ、我ノ知識ダケデハ完治ハ不可能ダガ、

症状ノ改善ハ可能ダトイウ結論が出タ。」

「一体、どういふことなのです。ハサン殿？」

「最初ニ言ッテオク。カトレア嬢ニ発症シテイルノハ、2ツノ病ガ複合シタモノダ。」

「それらは、どういったものなのでしょうか？」

「1ツハ『鉄欠乏性貧血』。コレハ食事ニ含まレル鉄分ガ吸収サレズニ起コッタモノダ。

モウ1ツハ『悪性貧血』ダ。コレハ食事ニ含まレルビタミンBト呼バレものが吸収サレズニ起コッタモノダ。

コノ両者カラ推測スルニ、カトレア嬢ノ胃ガ通常ヨリモ小サイ、アルイハ機能障害ヲ起コシテイルモノト考エラレル。

体ガ重イノハ貧血ノセイデアロウ。」

がさこそ

「故ニ、」

どんー！！

「カトレア嬢ノ食事ニハ、コノ『鉄鍋』ヲ使用シテイタダキタイ。
コレデ料理ヲスルコトニヨリ鉄鍋ニ含マレル鉄ガ溶ケ出シ、
不足シテイル鉄分ヲ補ウコトガデキル。」

がさこそ

「ソレト・・・」

ぴらっ、

書き書き $\phi(。。)m \uparrow$ (イメージ図 w)
ぴっ!!

「ココニ書イテアル通りニ調合スレバ、薬トナル。」

コレヲ毎朝ノ食前ニ服用スルコトデ、胃液ノ分泌ヲ助ケルコトガデ
キル。

コレニヨリ、健常者ト変ワラヌ生活ヲ送ルコトガデキヨウ。

チナミニ、ソノれしぴニ書カレテイル分量ハ30回分ダ。

ツイデニ、服用スルノハ朝ダケダ。起床直後ニ服用サレルト良カロ
ウ。

用量以上ニ服用スルト毒にシカナラヌ故、クレグレモ飲ミ過ギヌヨ
ウニ。」

「おお、始祖ブリミルよ!!」

あなたに感謝しますわ、ミスタ・ハサン。

そして、娘を助ける道を示していただいたこと、心よりお礼を申し
上げます。」

「礼ハ我デハナク、我が主ニ。」

我が主ニ頼マレナケレバ、コノヨウナ事ナドシテオラス。

我ハ暗殺者。闇ニ生マレ闇ニ潜ミ闇ヲ切り裂ク者。
頼マレテ殺スコトコソ、我ガ仕事。」

「ふふつ。ずいぶん優しい暗殺者ですね。」

「コウ見エテモ、暗殺者ハ約束ヲ何ヨリモ重視スルシ、嘘モ言ワヌ。
マシテヤ主従ノ契約ヲ結ンダ主カラ頼マレタノダ。
我ガ拒否スル理由ハ無イ。

サテ、主ヨ。明日モ学校デアロウ。戻ラヌノカ？」

「そ、そうね。ありがとうハサン。

それじゃ、お母様、ちいねえ様。私達は学院に戻ります。」

「アア、トコロデナ、母殿。来ル途中デ1ツ思ツタノダガ、ヨロシ
イカ。」

「なんですか、ミスタ・ハサン？」

「ナニ、大シタコトデハナイ。

ココニ来ルマデニ籠トイウモノニ乗ツタノダガ、籠ヲモット大キ
ク・・・

ソウダナ、30人程乗レルヨウニスルコトハ可能カ？」

「さあ、分かりません。それがどうしたのです？」

「我ガ訪レタコトガアル国ニ、何人カデ同ジ物ニ乗り合イ、
距離ニヨッテ異なる料金ヲ払ウ乗り物ガアツテナ。」

「それは乗合馬車のようなものでしょうか？」

「ソナ感ジダ。アル程度大キナ街ゴトニ竜籠ノ発着場所ヲ確保シ、移動シタ距離ニ応ジテ料金ヲ貰ウヨウニスレバ、モウ少シ安クナルノデハナイカ？」

ソウスレバ、利用人数モ増エ、結果トシテ利益モ出ヨウ。」

「面白い意見、ありがとうございます。ミスタ・ハサン。」

「思ツタダケダ。実現デキルカハ知ラヌ。

サア、主ヨ。今度コソ戻ルゾ。」

「ええ、ハサン。お母様、ちい姉様。行ってまいります。」

「気をつけるのよ、ルイズ。」

S I D E .. カリン

あのハサンという者、まったく隙がなかったわ。

カトレアを傷つける。などと言われた時には

思わず殺気を放ってしまったけども受け流されたみたいだし、かと思えば、ルイズには絶対的に服従しているかのよう。

ハサンの存在がルイズにとって、吉と出るか凶と出るか

見極めさせていただくことにしようかしらね。

願わくば、ハサンとの出会いがルイズにとって良きものと成りますように・・・

S I D E .. O U T

P M 1 0 .. 1 7 — ルイズの自室 —

「今日はご苦労様、ハサン。

今日ほど、アナタが私の使い魔で良かったと思った日はなかったわ。」

「喜ンデモラエタヨウデ、何ヨリダ。」

「それにしても、なんで薬の時、変身しなかったの？
私でつきり、あの女の人が調合するのかと思ってたわよ。」

「我ハ職業柄、毒物ニ詳シイノデナ。

毒ニ詳シイトイウコトハ、逆ニ薬物モヨク知ルトイウコトナノダ。
分カラナケレバ、我ノ矛盾ノ１ツトデモ思ッテクレ。」

「それ位、私にだって・・・」

ドゴオオオオン！！

「な、何、今の音!？」

「ムウ、ドウヤラ招カレザル客トイウモノラシイナ。
我ガ偵察ニ出ル故、主ハココヲ離レルデナイ!!」

ヴァリエール邸にて（後編）（後書き）

ルイズ対キュルケは起きません。

だって、キュルケがハサンに惚れてませんから。

日付は、たぶん合ってる筈・・・

閑話（キャラクター設定その1）（前書き）

2桁突入記念（？）ですが、ハサンだけ。

閑話（キャラクター設定その1）

名前

ハサン・ザッバーハ

クラス

暗殺者、使い魔

ステータス

攻撃 C

速度 B+

魔力 C+

対魔 C（ただし風系統限定でEX）

宝具 E（ただし汎用性はA）

シンボルカラー 漆黒

説明..

本作の主人公にして、ルイズの使い魔。

複数の存在の集合体である「ハサン・ザーバツハ」に属しながらも

己でありながら己ではないことに葛藤し、己が己であることを望む。

自我を持ちながらも、自らの存在が自分だけのものではないことを

他の「ハサン」よりも理解し、変装に特化している為

「他者の姿および能力」を一時的に自らのものとする『妄想変身』を使う。

また、生前(?)の職業柄、契約を重視するが、それ以上にルイズの為になると判断した事を重視する。

基本的にルイズにお願いされるとOKだが、断った方がルイズの為になると判断した場合NGを出すこともある。

召喚された翌日のみ、無駄に好戦的。

謝辞を言われることに慣れておらず、実は照れている。

本作のクーデレ担当（嘘）。

固有スキル

気配遮断 A+

本気を出せば不可視レベルまで可能だが、某「知られざる英雄」みたいに

「他者の記憶に残らない」までは至らない。

（至ったらチートレベルじゃ済まないとは思ってるし、至れるわけがないw）

妄想変身（宝具）

「ハサン・ザーバツハ」が出会ったことがある「他者になりきる」ことで、

その「姿・能力」を一時的に借りる（＝自らのものとする）チート宝具。

その為、異常なまでに使い勝手が良い。というか、良すぎる。ただし、本人よりもハサンの方が優れている能力を除いて、

最低1ランクダウンする。

（ハサンが本人以上の場合、本人と同ランクになる。）

このため、対ギーシュ戦では『本来であれば複数出せるはずの竜牙兵を1体しか出せなかった』し、

降らせた雷は本来のキャスターのものよりも『少ない』。

（威力が同じなら数が減る、数が同じなら威力が落ちる。同質とするか同量とするか、選択の違い。）

真・妄想変身（宝具）

「ハサン・ザーバツハ」が出会ったことがある「他者になりきる」ことで、

その「姿・能力」を一時的にだが、完全に自らのものとするチート宝具2号。

完全にコピーするので、ステータスも同等となる。

やり過ぎてると自覚しているので、

- ・使用制限時間15分

- ・10日に1回のみ可能

・使用後24時間以内に12時間の睡眠に入る（いつ眠るかはランダム）の設定。

最初は固有結界の設定で、名前も妄想結界だったが

「魔術師ではないハサンが固有結界を使えるのか？」と考えた作者の脳内会議の結果、却下。

「完全に他者に変身する」という形に変更された。

呪文の詠唱はその名残である。

固有結界は術者の心象風景を具現化する為、固有結界を使える誰かに変身し、使用したとしても

ハサン独自の固有結界になる予定だが、固有結界を使う予定は、今のところ無い。

なお、固有結界を使用する場合、使用制限時間は5分まで減る。

備考

作者が面白半分で考えた「俺サー（俺が考えた最強サーヴァント）」の1体。

ZERO（小説版Fate）や Fate を読んだ感じ、

4次のハサンは「妄想幻像Ⅱ偵察特化」、5次のハサンは「妄想心音Ⅱ殺害特化」と、

同じ名前でも存在が違えば宝具が違うので、たぶんギリギリセ

ーフ（だと信じたい）。

これ以降は4次5次、オリジナル（勝手な3次以前、4次5次の平行世界）を問わず色々と変身する予定。

4次ハサンといい、5次ハサンといい、マスターに対する忠誠で勝てそうなのって

4次ランサー辺りしか思いつかないくらい、変に忠誠心が強そうだったので、

マスターに対する忠誠を上げたら、ルイズ至上主義とまでは行かなくても、

ルイズ大好き暗殺者になってしまった。

作者が暴走した場合、突き抜ける予定。（性格的な意味で）

閑話（キャラクター設定その1）（後書き）

ぶっちゃけ、『ハサンだけ』異常なまでに設定が決まっていたりします。

実際は書いてるうちに1人歩きするんだろうけど・・・

ステータスは分かりやすく、かつ簡単に書こうと思ったら、ああなりました。

2010. 11. 01

脱字があったので訂正。

現在、考えてるだけで『妄想○○』は10種ほどありますが、ボツネタが3個あります。

2010. 11. 21

以前から指摘があったので、

気配遮断S ⇒ 気配遮断A+ に変更。

2010. 12. 14

真・妄想変身 追加。

トリスティン魔法学院強盗事件（前編）（前書き）

3日目に2話目を投稿した時、1話目だけの時点で2件お気に入りがありました。

今現在66件です。で、思ったんですが。

何、このペース？何か、期待される要素あったっけ？

続き書くのがめっちゃ怖いんですけど。

・・・すいません、嘘です。

トリステイン魔法学院強盗事件（前編）

S I D E .. ? ? ?

あのハゲが言ってた通り、普通では解除できなかったが、
鍊金で脆くなった場所をゴーレムに攻撃させりゃ、あっさり壊れる
んだねえ・・・

灯台下暗しってヤツだよ。

かなり大きな音がしたし、宿直が近づく前に目的のブツを頂いてト
ンズラしますか・・・

S I D E .. O U T

S I D E .. ハサン

ナンダ、あれハ？

ばーさーかーヨリモハルカニ大キイ人型・・・

巨大ナごーれむノヨウダナ。

肩二人影が見エルナ。

察スルニ、彼ノ者ガ術者ニ相違アルマイ。

コッチ（女子寮）ニ向カツテクル気配ハ無シ、オソラクハ物盗リノ
類カ。

放ッテオイテモ害ハ無イヨウダガ、一応、様子ヲ伺ウコトニシヨウ。

S I D E .. O U T

翌朝、学院長室には数人の教師とルイズ、ハサンが集まっていた。

「オールド・オスマン、彼等が目撃者のようです。」

「ご苦労じゃったな、コルベール君。」

さて、ミス・ヴァリエール。昨夜あった事を教えてもらえんかな？」

「オールド・オスマン、目撃したのは私ではなく、私の使い魔です。私は何も見ていません。」

「では、君の使い魔に昨夜あった事を話してもらえるように言うてはくれんかな？」

ワシ等はあまり、君の使い魔に信用されておらぬようだな。」

「ハサン、貴方が昨夜見たことを、ここで話してもらえない？」

「昨夜トイウト、昨夜ノ物盗リカ？」

「そうじゃ。是非、聞かせてほしい。」

「ヨカロウ。昨夜、主ト話シテオツタラ大キナ物音が聞コエタノデナ。」

偵察をヲ兼ネテ外ニ出ルト、

ゴーれむトオボシキ大キナ人影ト、ソノ肩ニ乗ツタ小サナ人影ヲ視認シタ。

小サイ方ハ、大キイ方が建物ニ開ケタ穴カラ建物ニ侵入シシバラクスルト、出テ行ツタ。以上ダ。」

「君が見たのは、それだけかの？」

「『我●●が見タ』ノハ、ソレダケダ。」

主ニ危険ハ無イト判断シタタメ、主ノ部屋ニ帰ツタ。」

「ふむ、困ったのお・・・」

と、そこにミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル、どこに行っていたんですか？
大変な事件が起こったのですぞ！！」

興奮したコルベールが大声を上げる。

が、ミス・ロングビルは素無視でオスマンに報告する。

「オールド・オスマン、フーケの隠れ家を発見しました。」

全員の視線がミス・ロングビルに集中した。

「今朝起きたらこの騒ぎでした。

フーケのサインを見て、これがトリステイン中で噂の怪盗の仕業と
知り、

すぐさま調査を開始していました。」

オスマンがゆっくりと告げる。

「ふむ、報告を聞こう。

その居場所はどこかの？」

「はい。近くの農民に聞き込みをしたところ、

森の廃屋に入って行く黒いローブの男を見たそうです。

おそらく、その男がフーケで、

廃屋はフーケの隠れ家ではないでしょうか？」

「流石はミス・ロングビル。
仕事がお早いすな。」

「ミス・ロングビル、そこまでの距離は？」

「大体、徒歩で半日、馬で四時間程ですわ。」

「すぐに王室へ連絡を！！」

王室直属の騎士団を出動してもらわねば。」

コルベールが叫んだが、
オスマンは首を横に振る。

「あのノロマな騎士団に依頼してる間に、
フーケは破壊の杖を持って国外に逃亡しとるじゃろう。
それに、これは学院の問題じゃ。
我等で解決すべき事じゃよ。」

そして、オスマンはおもむろに告げる。

「では、フーケ搜索隊を編成する。
我こそはと思わん者は杖を掲げよ」

が、誰も杖を掲げない。

「ん、どうしたのじゃ？
普段、生徒達に自分の属性を自慢しておるのじゃろう？
ならば、生徒達に手本を見せてやるのも教師の役目じゃろう？
ほれ、ほれ。」

オスマンが挑発してみるが、それでも反応がない。そんな中、1本の杖が上がる。

「私が行きます。」

「ミス・ヴァリエール！」

ミセス・シュヴルーズが、驚いて声を上げた。

「何をしているのですか!？」

あなたは生徒なのです。

ここは我々教師に任せなさい。」

「だって、誰も掲げないじゃないですか。

それに、目撃したのは私の使い魔です。

ハサンは私が居なければ、フーケの逃走を防げたかもしれません。そうだとしたら、フーケを逃がした責任は私にあります。」

「ヴァリエール、それは屁理屈だ!!

許可できません!!」

「でしたら、何故杖を掲げないのですか。ギトー先生？
オールド・オスマン、私にフーケ搜索の許可を。」

「一本取られたのう、ギトー君。

ミス・ヴァリエール、その意気や良しじゃ。

しかし、1人では心許無いのう。

ふむ、どうしたものか。」

「主ガ行クト言ウノナラ、我モ同行シヨウ。

ソレナラ良イカ？」

「目撃者である君が同行するのならば許可しよう。」

「オールド・オスマン、正気ですか!？」

生徒に盗賊退治をやらせるなどと・・・」

「じゃったら、君が行くかね、ギトー君？」

ミス・ヴァリエールの言う通り、君は杖を掲げなかったのじゃ。君にそれを言う資格など、すでに有りはせぬのじゃよ。

それにじゃ、彼女の使い魔は

ドットクラスとはいえグラモン元帥の子息と決闘し、これを傷一つ負うことなく、また負わせることなく退けたと聞いておる。

心配は無用じゃろう。」

「しかしですな」

「・・・オイ。」

「ん?」

「サツキカラ黙ッテオレバ、好キ勝手ニ言ウデハナイカ。

ソコノぎとートカイウ男、死又覚悟ハ十分カ?

遺言クライハ聞イテオイテヤルゾ。」

「使い魔風情が何を言うか!!」

「黙レ腰拔ケ。」

これを聞いて、顔を赤くしたギトーは

「決闘だ!!」

「我ノ戦闘技術ハ、貴様ノソレヲ圧倒シテイル。
決闘ナド無意味ダ。

ソレニシテモ、コノ間ノ小僧トイイ、貴様トイイ、貴族ハ決闘ガ趣味ナノカ?

我ハ、アマリ良イ趣味ダトハ思ワヌノダガ、
コレモ文化ノ違イトイウモノナノダロウカ。」

「なっ、なんだとおおっ!!
貴様、今、なんと言った!?!」

「意味ガ分カラナカタノナラ、言イ直ソウ。
へたれガ。我ヲイワスナド、10億万年ハヤインジャ、コラ。
アト、趣味ガ悪イ。」

見事な語学力です、ハサン。

「なっ、なっ、なっ・・・」

ぶるぶると肩を震わせるギトー。

「今ノハ、南部方言ノ亜流ダ。
通ジルカドウカ不安ダツタノダガ・・・
ドウヤラ通ジタヨウダナ。ヤレヤレダ。
ゴ老体、ふーけトヤラノ搜索ニ行ッテモイイカ?」

「ほっほっほっ。よろしくたの」

「『エアハンマー』!!」

オスマンが言い終わる前に、攻撃を仕掛けるギトー。しかし、不可視の鎚はハサンを攻撃するのを嫌がるかのように消える。

「!？」

「アア、通ジテナカタノカ？

モウ1度ダケ言ウゾ。貴様ノ攻撃ナド無意味ダ。

次ハ無イト思エ。確實ニ殺スゾ？」

「もういいじやろう、ギトー君。

これ以上やれば、彼は間違いなく君を殺すじやろう。

それにしても分からんな。何故、君はギトー君を嫌うのかね？」

「タッタ1ツノしんぷるナ答エダ。

あれハ我が主ヲ侮辱シタ。」

「立派な使い魔じやのう、ミス・ヴァリエール。

ギトー君も良いな？

彼は例え君が束になっても適わんよ。

君より強い者が同行するのじゃ。

もはや異論はあるまい？」

「では、私が案内を。」

「そうじゃな、ミス・ロングビル。

案内を」

「道案内ハ不要ダ。

ろんぐびるトイッタカ？

少シ話ガアル、ツイテ来イ。

ソレト・・・」

ハサンが扉を開けると、生徒が数人転がり込んでくる。

「貴様等、盗ミ聞キヲスルナラ、モウ少シ上手クヤレ。」

トリスティン魔法学院強盗事件（前編）（後書き）

一応、次でフーケ編は終わる予定ですけど
下手したら3話行くかも・・・

トリスティン魔法学院強盗事件（後編）（前書き）

（前編）を投稿した後、

イワス が通じるのか？ という質問がありました。

イワス は 「奥歯をがたがた言わす」の略だった筈なので
たぶん、通じます。

トリステイン魔法学院強盗事件（後編）

S I D E .. ギーシュ

ギトー先生の魔法をかき消しただって!?

この間の決闘の時もそうだったけど、先生の魔法が通用しないなんてあの使い魔は何なんだ？

S I D E .. O U T

S I D E .. 褐色の娘

ギトー先生の魔法を何もせずにかき消したの!?

ギーシュと戦ってた時とは雰囲気が違うけど、

あの使い魔は一体、何なのよ!!

S I D E .. O U T

S I D E .. 青い娘

・・・すごい。

ギトー先生は怒ってたから手加減なんてしてない筈。それでも通用してない。

あの人、かなりの手練。

S I D E .. O U T

ハサンが扉を開くと転がり込んできたのは
ギーシュ、キュルケ、タバサだった。

「貴様等、盗ミ聞キヲスルナラ、モウ少シ上手クヤレ。」

「たしかに盗み聞きとは感心せんわい。

のう、ミスタ・グラモン、ミス・ツエルプストー。そして、ミス・
タバサ？」

それで、3人はどうしてここに居るのじゃな？」

「オ、オールド・オスマン。

僕にもフーケ搜索を手伝わせてください。」

「私も。」

「……。」

「聞いておらんかったのか？」

ワシが聞いておるのは、

諸君等が『何故』、ここに居るのかじゃ。」

「えっと、その、あの……。」

「おおかた、盗賊騒ぎを聞きつけて、様子を見に来た。

いや、この場合は聞きに来たになるのかの。

そんなところじゃろう。

さて、諸君等には盗み聞きをした罰を与えねばなるまい。」

目を細めるオスマン。

（（ビクッ!!））（???）

「諸君等には、ミス・ヴァリエールのフーケ搜索を手伝ってもらふこととする。

よいな？」

「断ル。」

「何故じゃっ!? 人数は多い方が良いじゃろう？」

「そうよ、ハサン。人数が多い方が見つけやすいじゃない。」

「人数が多イニ越シタコトハナイガ、足手マトイガ増エルノハ迷惑ダ。

特ニ、ソコノ小僧ハ役ニ立ツトモ思エヌ。」

「そちらの言い分はもつともじゃ。

しかし、ワシとしてもこの3人には罰を与えねばならんので。

ここは、この老人の顔を立てると思つて引き受けてはくれんか？

それにじゃ、この事はミス・ヴァリエールにとつても良いことじゃと思うぞ。」

「ゴ老体ノ面子ナド知ツタコトデハナイガ、主ノ為ニナルトハドウイウコトダ？」

ソチラノ言イ分ニヨツテハ、同行ヲ許可スル。」

「ミス・ヴァリエールは、君が知っているか知らないかは知らぬが、魔法の制御が上手いはず、失敗ばかりでう。

その為じゃろうが、同年代の他の生徒に比べると友人が少ないと思うのじゃ。

これをきっかけに友人が増えれば、ワシ等としても、ミス・ヴァリエールとしても

喜ばしいことじゃないと思うがのう？」

「・・・一理アル。主、人数が増エルガ良イカ？」

「私は良いけど、キュルケ。アンタは大丈夫なの？私と手を組むことになるのよ？」

「あら、愚問ね。ヴァリエールが行くのにツエルプストーが行かないわけが無いじゃない。」

「主、コイツ殺ソウ。」

「殺しちゃダメだってば！！
いいわ、キュルケ。付いてきなさい。
ギーシュとタバサもいいわね？」

「ああ、勿論だとも。」

「・・・了承。」

「話は決まったようじゃな。

この5人でフーケ搜索を行ってもらう。

諸君、よいな？」

「」「杖に掛けて」「」

「諸君等はこれからはチームじゃ。
決して仲たがいすることなく、

また、誰1人として欠けることなく帰ってくるのじゃぞ。」

「話ガソレタガ、ソコノ眼鏡女。」

少し聞キタイ事ガアル、付イテ来イ。」

「ハサン、ミス・ロングビルに何を聞くの？」

「確認シタイコトガアルダケダ。主ラハ準備ヲサレヨ。」

『破壊ノ杖』トヤラノ回収ニ向カウゾ。」

「校舎裏」

「ココナラ良イカ。」

「ハサンさん、私に聞きたいことは何でしょうか？」

「『破壊ノ杖』トヤラヲ盗ンダ後、

罨ナド仕掛ケテハオラヌダロウナ？ 『土クレノふーけ』ヨ。」

「！！あんた、気付いてたのかい？」

「貴様ハ気付イテイナカタノダロウガ、

『我』ハ昨夜カラ、ズット貴様ノ後ヲツケテイタ。

故ニ、道案内ハ不要ダト言ッタノダ。」

「じゃ、何か。あんたはあの場で嘘を言っていたのかい？」

「言ツタコトハ真実ダ。ソシテ、貴様ヲ監視シテイタノモ事実ダ。」

「はあ、どうやらどっちも本当のことらしいね。」

んで？質問に答えりゃ見逃してくれるってのかい？」

「主ニ危害ヲ及ボサヌノナラ、今回ハ見逃シテヤツテモ良イ。
聞キタイコトハ1ツダ。」

貴様が報告シタ廃屋ニハ罨ハ無イナ？」

「ま、搜索の時は無理を言っても加わるつもりでいたしね。
罨なんて仕掛ける時間もなかったよ。
どう？これで満足？」

「ソノ言葉ヲ信ジヨウ、シカシ・・・」

ジャキンッ！！

「嘘デアッタ場合、我ハ地ノ果テマデモ貴様ヲ追イ
必ズ殺ス！！」

一馬車の中一

「あ、来た来た。ハサン、出発するわよ。」

「待タセタナ。」

「ところで、誰が馬車を運転するんだい？」

「我ダ。『妄想変身』！！」

ぷしゅ~~~~~

マッチョな髭ヅラがそこに居た。

「ぐはははは。行くぞ、お嬢に小僧ども。
さっさと乗り込めい。」

「「「「!」?」」」」

「森の奥、廃屋付近」

「さっきの男は誰なのよ?」

「あれハ、征服王ト呼バレタ存在ダ。」

「王!? あの人、王様なの!」?

「肯定ダ、主ヨ。認メタクナイガ、あれハ王ダ。
ドウヤラ目的地ニ着イタヨウダ。
我が先行スル。」

すっ・・・

音も無く消えるハサン。そして、

「罨ハ無イ。小僧、来イ。」

「な、なんで僕?」

「戯^{タワ}ケガ。貴様ハ女ヲ危険ナ目ニ合ワセタイノカ?
女ヲ守レズシテ、何ガ男カ。」

ソレニ、我ハ『破壊ノ杖』ガドレカハ知ラヌ。」

「ま、守る? そうだよ、女の子を守るのが男の子なんだ。」

逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、……」

「何ヲブツクサ言ッテイル？ 毘ハ無イ。

サッサト杖ヲ回収シテ来イ。」

「あつた……。これだ。」

「ソレデ合ッテルノダナ？

シカシ、コレハ杖トイウヨリ筒デハナイカ。」

「間違いないよ。見学の時に見たんだ。」

「良シ、帰ルゾ。ふーけハコノ近クニハ居ナイ。」

「え、そうなの？」

「杖ヲ持チ帰ルダケデモ十分ダロウ。」

「そうね、ハサンがそう言うんだったら……」

「帰ルゾ。『妄想変身』！！」

ぷしゅ………

今度は両目に眼帯をした長身の女性が現れる。

「では、学院に戻りましょう。

馬車から振り落とされないように気をつけてください。」

ルイズ一行は学院に戻ると、その足で学院長室に向かう。

「オールド・オスマン、『破壊の杖』を取り戻してまいりました。ですが、残念ながら『土くれのフーケ』は発見できませんでした。」

「そうか、そうか。フーケを捕らえられなかったのは残念じゃが発見できなかったのなら仕方がない。」

諸君等が無事に『破壊の杖』を取り戻せただけでも、十分に喜ばしいことじゃ。諸君、ご苦労じゃった。

今宵はフリッグの舞踏会じゃ。おいに楽しむがよろう。」

「「はい!!」」

「・・・(コクン)」

「では、解散じゃ。すまんが、ハサン君は残ってくれんか？」

「了解シタ。」

ギイ、ボタン・・・

2人きりになったのを確認すると、

「『サイレント』。これで大丈夫じゃろう。」

さて、ハサン君。君には本当のことを聞きたい。

『君』が昨夜見たことの全てを、な。」

「今朝言ツタ通りダ。発言ハ覆ラヌ。」

「では、君に倣^{なら}って言い方を変えましょう。
此^{こたび}度の一件、君は何処まで知っておる？」

「杖ガ盗マレタ後ハ、『全テ』ダ。」

「ということは、フーケの行方も知っておるのじゃな？」

「知ッテイル。シカシ、約定ニヨリ教エルコトハデキヌ。マタ、教エルツモリモナイ。」

「では、これだけは答えてくれんか？
何故、フーケは貴族が居る場所だけを狙うのじゃ？」

「例エバ、ダ。」

私服ヲ肥ヤス貴族ドモカラ、公ニデキヌ金品ヲ奪イ、
ソノ金デ空腹ノ子供達ヲ養ウ者ガ居ルトシヨウ。
ソノ者ノ行イハ、正義カ？悪カ？」

「そういう事かね？」

「ソウイウ事ダ。我ハモウ行クゾ。」

「引き止めてすまんかったの。」

「ジジイ、2ツ貸シダ。今度払エ。」

「ほっほっ。この老人に出来る事ならの。」

「喰エナイ爺サンダ。」

ボタン・・・

S I D E .. オールド・オスマン

ほっほっほっ。なかなかどうして、義理堅いのう。

フーケの行方を知っておるのに、約束しておるから教えぬとは。貸し2つと言ったか？

無茶な要求はせんじやろうが、返す時が怖い、怖いのもう。

S I D E .. O U T

トリステイン魔法学院強盗事件（後編）（後書き）

今回の変身はライダーコンビ。

技の1号、力の2号じゃありません。

番外編一ギーシュの雄叫び一(前書き)

感想にリク(?)があっただので、ネタにさせていただきました。

番外編一ギーシュの雄叫び一

「ハサン殿、僕にゴーレム作成を指導してください!!」

ハサンがいつもの様に、ルイズと話をしていたら突然ギーシュがルイズの部屋にやってきて、そんなことを言い出した。

「面白ソウデハアルナ。

ダガ、断ル!!」

「な、何故ですか？」

「我ハ『のー』ト言エル使イ魔ダカラナ。マア、ソレハオイトイテ・

先日、我ハ貴様ニ勝利シタガ、ソノ後貴様ハ我が主ニ謝罪シタカ？
我ニ負ケタ後、何モシテオラヌダロウ？

無様ニ気絶シオツテ。ココガ戦場ナラ、貴様ハ既ニ死ンデオルワ。
ソナ貴様ニ、我が何カヲシテヤル義理ハ無イ。
ソシテ何ヨリ、我ハ魔術師デスラナイ。」

「あれ程強いゴーレムを作れるのに、ハサン殿はメイジではないのですか？」

「ソノ通りダ。タシカニ貴様ノわるきゅゝれヨリハ強イノダロウガナ。

あれハ我ノ技ノ一ツニスギヌ。」

「でしたら、その技を是非教えてください。

お願いします。」

土下座せんばかりの勢いで頭を下げるギーシュ。

「ナラバ、条件ガアル。」

「何でしょう？僕にできることなら、何でもします！！」

「マズハ、我が主ニ謝罪セヨ。ソノ上デ、我が主ニ許可ヲ得ルガ良イ。

主ガ許可ヲ出シタノデアレバ、我ニ反対スル理由ハナイ。」

「ルイズ、ごめん。今まで馬鹿にして悪かった。

都合のいい話だけど、許してくれないか？」

「ギーシュ、アンタがそこまで低姿勢で物を言うのも珍しいわね。

そんなに、ハサンみたいなゴーレムを作りたいの？」

「勿論だとも！！あんなに強くて速く動けるゴーレムを僕は知らないよ！！」

「ふうん、まあいいわ。ハサン、ギーシュにアナタの技を教えてあげなさい。」

「了解シタ、我が主ヨ。」

ぎーしゅトイッタナ。貴様ハわるきゅーれヲ何デ作ッタ？」

「青銅です。」

「何故、骨デ作ラレタごーれむガ、貴様ノ作ッタ青銅ニ勝テタト思

ウ？

ソレガ分カラネバ、話ニモナランゾ。」

「純粹な技術ではないのですか？」

「違ウナ。ソレヨリモ単純ダ。」

「単純？技術よりも単純なことなのですか？」

「ハサン、私も分からないわ。どうということ？」

「何、同ジ厚サデアレバ骨ハ青銅ヨリモ硬イ。ソレダケダ。」

「え？」

「は？」

「硬サニオイテ、骨ハ銅ヨリモ硬イ。

チナミニ、人体デ最モ硬イノハ齒ダ。覺エテオケ。」

「ただの材料の差だったのですか！？」

「厳密ニ言ウト、材料ノ質、関節ノ動キ、1体ニ込メタ魔力ノ量。全テニオイテ、我が貴様ヲ上回ツタ。ソレダケノコトヨ。考エテモミヨ。

”どつとくらす”デ練成出キル青銅ハ、

”すくうえあくらす”デ練成出キル金ヨリモ硬イノダゾ？

ソコダケ見レバ、”どつとくらす”ガ”すくうえあくらす”ヨリモ

劣ルトハ限ラン。

要ハ使イ方ヨ。」

「それだけって、簡単に言うわね・・・」

「関節、魔力を込める・・・」

「そうか、そうだったのか!!」

「分かったか？」

「はい。目から鱗が落ちる思いです。」

「次ハ技術ダ。コレハ実践シタ方ガヨイナ。

主ヨ、我ハこいつヲ鍛エテクル。

小僧、付イテ来イ。」

「はい!! ありがとうございます。」

—学院裏の森—

「ココナラ、誰ニモ邪魔ハサレヌナ。デハ、『妄想変身』!!」

ぷしゅ~~~~~

煙が晴れると黒髪の少年が現れる。

「これより貴様の訓練を開始する。口答えは許さん!!」

俺のことは軍曹と呼べ。」

「はい、軍曹。」

「返事は『サー、イエッサー!!』だ。それ以外は認めん!!」

「わかったか!!」

「サー、イエッサー!!」

「いい返事だ。まずは基礎体力作りだ。

そこにある丸太を担いで俺が良いというまで全力で走れ。」

「ゴーレム作りと、いったい何の関係が」

「口答えは許さんといったはずだ!!」

「サー、イエッサー!!」

「さっさと走らんか!!」

「サー、イエッサー。」

「声が小さい!!」

「サー、イエッサー!!」

「速度が落ちたぞ!!」

「サー、イエッサー!!」

そして少年は懐から手帳を取り出すと・・・

「この××が!!」

「だから貴様は○○なのだ!!」

「その汚い××を○○して、△△してやろうか? この●●野郎!!」

手帳を見ながら、大声でギーシュに罵声を浴びせる。
そして、

「悔しいか？」

悔しければ弱みを見せるな！！
ガッツを見せろ！！」

「サー、イエッサー！！」

などといった事が数日続き、

「今まで、俺のシゴキによく耐えた。

現時点を以って貴様はウジ虫を卒業する。」

「サー、イエッサー！！」

「貴様は何だ？」

「メイジであります、サー！！」

「ならば、現時点での貴様の持ちえる全力でゴーレムを作って見せろ。」

「サー、イエッサー！！

『青銅の戦乙女』！！

できました、サー！！」

ギーシュの前には、以前よりもずっと早く正確に
人に近い造型の戦乙女が21体整列している。

「ふむ、関節の可動部がまだまだ甘い。

しかし、以前よりは格段に進歩している。

今後これに慢心することなく精進せよ。」

「サー、イエッサー!!」

「これで、貴様の訓練課程を全て終了する。以上、解散!!」

「センキュー、サー!!」

ハサンが変身した某軍曹が、知り合いから借りたという『指導のた
め』の宝具。

その表紙には、こう書かれていたという・・・

「マオお姉さんの海兵隊式ののしり手帳（新兵訓練編）

く照れずに力いっぱい叫んでみようく」

また、このシゴキに耐えたギーシュは精神的に大きく成長し、

ラインを飛び越し、土のドットからトライアングルまで一気に成長
したのだった。

これは、ありえたかもしれないお話。

番外編ーギーシュの雄叫びー（後書き）

グッダグダですね。すいません。

宝具

マオお姉さんの海兵隊式ののしり手帳（新兵訓練編）
く照れずに力いっぱい叫んでみようく

ランク

新人教育の場合のみEX

対象

1く99人

効果

肉体的な訓練に精神的な訓練を混ぜ、一気に成長させることが可能。

対象の精神が耐えられない場合、廃人と化すこともあるが、
対象の精神が耐え切った場合、戦闘狂になる、
恐ろしいほどハイリスク・ハイリターンな宝具。

この宝具は完全にネタです。すいませんでした。
でも、オンディーネ騎士団にも使ってみたいw
名前を（新兵訓練編）から、何に変えたものやら・・・

タイトルの 雄叫びllウォークライ です。たしか・・・

番外編2 ルイズと月の物語ー（前書き）

フリッグの舞踏祭のシーンをカットするかどうか、思案中。

やっても短そうだし、逆に言えば短いから考えるのも手間がかからんし・・・

どうしたものか・・・

番外編2ールイズと月の物語ー

ある晩、ルイズの自室。

「ねえ、ハサン。」

「何ダ、主ヨ？」

「ハサンが元々居た世界って、どんな所だったの？」

「月ガ1ツシカナク、魔術師ハ隠レテ生キル世界。
ソレハ、前ニモ言ツタナ？」

「聞いたわ。それ以外ではどんな所だったの？」

「科学トイウ技術ガ進歩シ、人ガ月ノムコウニマデ至ツタ世界ダ。」

「月のむこう・・・???」

「ソウダ。我ノ居タ世界デハ、人ハ月ニ行ツタノダ。
マタ、月カラ人ガ訪レタトイウ話モアル。

聞キタイカ？」

「聞きたい!!」

「ヨカロウ。ソレハコノヨウナ話ダ。」

昔々、月の国にある女性がいました。

その女性は大変な美人だったのですが、自分の美貌を自慢し、数々の男達に貢がせ、贅沢な暮らしをしていました。

やがて、彼女に貢ぐ男達の人数が余りにも多くなりすぎたので、月の裁判所は彼女を月の風紀を乱す者として、裁判に掛けました。騙された男達も居たので判決は有罪。

彼女に与えられた罰は『竹の中にて禁固10年』でした。

しかし、彼女が刑に服している間に、

偶然、『彼女が入っていた竹の真下』にあった月の火山が噴火してそのはずみで、彼女が入っていた竹が地球に落下してしまったのです。

彼女は竹の中から出ようとしていましたが、竹の中に入れられる際に赤ん坊にされていました。

赤ん坊の力では竹は割れません。

ある日のこと、彼女が入っていた竹が、あるお爺さんの手で割られました。

お爺さんは、竹の中から赤ん坊が生まれたことに驚きましたが彼女を連れて帰り、自分の子として育てることにしました。

お爺さんは自分の妻と相談して、赤ん坊に「^{カグヤ}輝夜」と名づけ、自分の子と同じように育てました。

やがて、10年が過ぎ、女の子は美少女に育ちました。

その噂を聞いた貴族達が、彼女と結婚しようと押しかけましたが彼女はここでも、貴族達に貢がせてしまおうと考えました。

そして、特に贈り物の多かった5人の貴族を集めました。

「私には、どうしても見てみたいものが5つあるのです。」

「「「それはどのような物ですか?」「」「」」

「1つは、決して焼けることのない火鼠の衣、
1つは海に住む龍神の持つ、龍顎の珠、
1つは仏様が修行した時に使ったと言われる、御仏の鉢、
1つは子孫繁栄の、燕の貝、
最後は金の枝に銀の根と真珠の実を付けた、蓬萊の枝。
この5つのうち、1つでも持ってきてくださった方に
私は嫁ぎましょう。」

貴族達は各自の役割を決めると、さっそく自分の役割を果たすべく
旅に出たり、商人から情報を集めたりしました。

しかし、誰も本物を持参することはできませんでした。

やがて、「輝夜」の噂は帝のもとにも届き、帝自ら「輝夜」の元を
訪れました。

「輝夜」は帝以上の権力者は居ないことを知っていたので、
結婚することを了承しました。

その頃、月では竹の数がどうして合わなかったので搜索していまし
た。

やがて、1つが地球に落ちたことを突き止めました。

そして、「輝夜」の行いが月に居た頃よりも酷くなっていることを
知り、

協議の結果「輝夜」を月に連れ戻すことを決めると、「輝夜」に

「次の満月の晩、月まで連行するので、そこんとこ1つヨロシク。」

と、連絡しました。

「輝夜」は月で刑に服するよりも、

わがままラダイス

『地球で帝と結婚して我々天国を築く』つもりだったので

帝に会った時に、悲しそうな顔をして、こう言いました。

「私は実は、月の者なのです。」

月の決定により、私は、次の満月の晩に月に帰らねばなりません。」
それを聞いた帝は答えました。

「私はこの国の帝だ。この国で私の思い通りにならぬことはない。
輝夜を月には返さない。」

やがて、満月の晩。

「輝夜」の屋敷は月からの迎えを邪魔するべく、数千人の兵でかた
められていました。

月の使者が訪れると、兵達は何もすることもできず倒れていきまし
た。

そして、「輝夜」は月の使者によって月に連行されました。

月に帰ると、裁判所では改めて裁判が行われました。

過去の月での罪状に地球での罪状が加算され、判決は有罪。

今度は『竹の中にて無期懲役』を言い渡されました。

これ以降、月でも地上でも、あの美女を見た者は居なかったそうです。

「トイウ話ダ。」

「ひどっ!!」

その女、ひどっ!!」

「ツマリダ。美人ダカラト言ッテ傲慢ニナルナ。トイウ事ダ。」

「キュルケにも聞かせてやりたいわね・・・」

ちゃんちゃん♪

番外編2 ルイズと月の物語ー（後書き）

原典は、昔アニメでやってた「竹取物語」。
うろ覚えだけど、だいたいこんな感じだったはず・・・

使い魔の披露(前書き)

知らない間に、お気に入り登録件数が3桁突入してました。

会話文が圧倒的に多い作品なので、大した魅力が無いと思っているので、

割と本気で「続きを書くのが怖い」です。

11.03

間違いの指摘があったので、一部修正。

使い魔の披露

ある日の授業中。

「最も強い系統は何かね、ツェルプストー。」

「そうですね、虚無ではないかと思えますわ。」

「そんな伝説の系統は聞いていない。」

4系統で最強は何か、と聞いているのだ!!」

「・・・少なくとも、風ではないと思います。」

「ほう？聞き捨てならんな。」

何故、そう思うのだ？」

「この間、ギトー先生はミス・ヴァリエールの使い魔に攻撃することすらできなかったじゃありませんか。」

その言葉に、教室中がざわめく。

「う、うるさい。この間はたまたま魔法に失敗したのだ!!！
そうでなければ、あんなことには」

その言葉にハサンが反応する。

「ソレコソ、聞き捨てナランナ。」

我ハ以前言ツタナ？

『我ノ戦闘技術ハ貴様ノソレヲ上回ル』ト。

モウ1度、格付ケヲシテオクカ？」

「と、とにかくだ。最強の系統は風なのだ！！」

「我ニ傷ヲ負ワセルコトスラ『デキナカッタ』者ガヨク言ウ。

少ナクトモ、風以外デアレバ、我ニ傷ヲ負ワセルコトクライハデキルゾ？

当タルカドウカハ別ダガナ。」

「ミス・ヴァリエールの使い魔も、ああ言っていますので、やはり風が最強というわけではないと思います。」

ギーシュも頷く。

タバサは我関せずといった感じで、読書に没頭している。

「あれは偶然だ！！」

「黙レ、腰拔ケ。ソレト、授業ハ中断ノヨウダ。

ドウヤラ、ただごとデハナイラシイ。」

ハサンが言い終わると同時に、コルベールが教室に乱入してくる。

「皆さん、本日の授業を中断し、校庭に整列してください！！」

「何事ですか、コルベール先生！？

今は私の授業中ですぞ！！」

「これより、アンリエッタ姫殿下が当学院にお越しになります。生徒全員でお迎えするように、との
オールド・オスマンの指示です。」

皆さん、くれぐれも失礼のないようにするのですぞ。」

そう言ってコルベールが走り去ると、生徒達はギトーを無視して我先に走り出す。

「姫様を見るのもひさしぶりね。」

「主ヨ、姫殿下トヤラニ会ツタコトガアルノカ？」

「小さかった頃、姫様の遊び相手をさせて頂いたことがあるの。」

「幼馴染トイウモノカ。」

「よく言えば、そうなんでしょうけどね。」

私と姫様は、小さい頃の遊び相手。それだよ。」

ハサンとルイズが広場に着くと、しばらくして立派な馬車から1人の少女が降りた。

「あれガ姫殿下トヤラカ？」

「姫様にむかって、アレは失礼よ。」

「了解シタ。」

そんな会話をしていると、コルベールが2年生にむかってこんなことを言い出した。

「アンアリエツタ姫殿下は、皆さんが召喚した使い魔を是非ともご覧になりたいと仰せです。」

突然ですが、皆さん、自分の使い魔を披露して下さい。」

くじ引きで順番を決め、ルイズの番が近づいてくる。

「ねえ、ハサン。貴方は何をするの？」

「マア見テイロ、主。悪イヨウニハセヌ。」

「次は、ミス・ヴァリエールです。」

「ああ、私の番になっちゃった。ハサン、信じるわよ。」

「了解シタ、我が主ヨ。」

ハサンとルイズが舞台の上に立つと悲鳴が上がった。

「我が名ハ『ハサン・ザーバツハ』！！

契約ニ従イ、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢ノ

使イ魔ヲシテイル。今日ハ我が能力ノ一端ヲ披露シヨウ！！」

そう言うのと、懷から林檎を出して置くと、小さく何かを唱えると煙に包まれる。

しばらくすると、煙から少し離れた所にハサンが現れ、高く飛び上がる。

「マズハ小手調べだ。」

そう言って、懷から短剣^{ダーク}を5本取り出し、投げつける。

短剣は狙いあやまたず、すべてが林檎に突き刺さる。

「次ハコレダ。」

再度、懷から短剣を5本取り出し投げつける。

今度は、林檎に刺さった短剣に、短剣が突き刺さった。

寸分変わらず、同じ場所に短剣が刺さったことに、観客席から歓声上がる。

「我ノたーんハ、マダ終ワツテオラヌ・・・
ブロウクン フォントム
コレデ最後ダ。『壊レタ幻像』！！」

そう叫ぶと、ハサンが上空で爆発した。
皆、呆然となって上を見ている。
すると、

「以上ダ。」

いつの間にか、ルイズの横にハサンが立っていた。

「今ノハ東方ノ『忍術』トイウ技術ノ1ツ、
『微塵隠レ』トイウモノダ。如何ダツタカナ？」

ハサンが言い終わると、万雷の拍手が起こる。

「ドウヤラ満足シタヨウダナ。
さていすふあくしよん
我ノ見世物ハ以上ダ。」

このあと、何人かの生徒が使い魔を見せたが
ハサンの出鱈目っぷりが目に焼きつき
思うように見せることができなかった。

そして・・・

「優勝は、ミス・ヴァリエールの使い魔です!!」

優勝者は勿論ハサンだった。

・ ・ ・

その晩、ルイズは頭にティアラを載せて喜んでいた。

「良カッタナ、主ヨ。」

「ええ。でもね、ハサン。

貴方が爆発した時は、どうしようかと思ったわ。」

「主ノ使い魔トシテハ相応シイト思ウガ？」

「もう・・・

そんなこと言わないの!!」

「冗談ダ、主ヨ。」

「貴方が言うと、本気にしか聞こえないのよ。」

「ムッ？トコロデナ、主ヨ。」

「どうしたの、ハサン？」

「ドウヤラ、客ノヨウダ。」

使い魔の披露（後書き）

『ブローケンファンタム
壊れた幻像』

『ブローケンファンタズム
壊れた幻想』の応用技。

自らの体を宝具に見立てて爆発させる。平たく言うと、人間爆弾。漢字表記を思いついたときに、「カタカナ表記はこれ以外にありえない!!!」

と、作者がノリと勢いだけで考えた。

元ネタは某勇者王。

姫の依頼

ハサンがルイズに、客が来たようだと告げた。

ルイズが扉に気を向けると、モールス信号のように規則性のあるノックが聞こえた。

「ハサン、お客様を入れてあげて。

私の知り合いだから、乱暴なことはいらないでね。」

「了解シタ。」

ハサンが扉を開けると、フードをかぶった人物が転がり込んできた。

「ああ、ルイズ。私の大事なお友達。」

「こんな時間に、こんな所で、

どうなさったのですか、姫様？」

「貴女にまで、そんなに畏まられてしまっては

私の居場所がありません。

昔のように気軽に話しなさい。」

「ですが、姫様」

「主ヨ。」

「ああ、ハサン。この方は、この国の王女、アンリエッタ様よ。挨拶なさい。」

「るいず殿ノ使イ魔ヲシテイル、『ハサン』ト申ス。」

「お披露目の時に爆発した使い魔さんね。すごいわ、あれはどうやったの？」

「禁則事項だ。」

「ハサン！！それで、姫様。なにゆえ、このような場所に？」

そうルイズが言うと、アンリエッタはポツポツと話しはじめた。

「実は私、結婚することになりました。」

「おめでとうございます。」

「ありがとう、ルイズ。しかし・・・」

「どうしたのです、姫様？」

何か、心配事でもあるのですか？」

「実は、ある手紙を入手してほしいのです。」

それは、私からアルビオンのウェールズ皇太子に宛てた私信なのですが

それが公になると、この話は破談となるでしょう。」

「そ、それはまさか・・・」

「そういう手紙なのです。」

しかし、私にはやはり言えません。

戦地になっているアルビオンに行って、手紙を取り返してきてほし

いなどと。

ルイズ、この話は忘れてください。」

「姫様・・・

わかりました、私めにお命じください。

アルビオンから手紙を取り返して来い、と。」

「ああ、ルイズ。私の大事なお友達。
ありがとう。」

それまで黙って2人の少女のやりとりを聞いていたハサンが
おもむろに口を開いた。

「アンリエッタ殿。先程、汝ハ我が主ヲ友ト言ッタナ？」

「ええ、その通りです。少なくとも、私はそう思っています。」

「デハ尋ネルガ、汝ノ言ウ友トハ

汝ノ命令デ死地ニ赴ク者ヲ言ウノカ？」

「ハサン！！姫様、失礼しました。

私の使い魔が、姫様にご無礼を。」

「いえ、いいのです。ハサンさん、続けてください。」

「我が主カラ見レバ、我が主ハ汝ノ臣下ダ。

汝ノ命令ニハ背ケマイ。王族トハソウイウ存在ダ。」

黙ってハサンの言うことに耳を傾けるアンリエッタ。

「いい機会だ。我が知ル誇り高キ三人ノ王ノ、
王トシテノ在リ方ノ話ヲシヨウ・・・」

生涯ニ只一人ノ友ヲ喪ツタ、孤独ナ財貨ノ王ハ言ツタ。
王トハ、神ノ代弁者デアリ民ヲ支配スル存在デアル、ト。

臣下ニ理解サレナカッタ、優シキ剣ノ王ハ言ツタ。
王トハ、国民ノ為ニ奉仕スル存在デアル、ト。

世界ニ覇ヲ唱エントシタ、勇猛ナ霸道ノ王ハ言ツタ。
王トハ、自ラノ生キ様デ道ヲ示ス存在デアル、ト。」

「・・・」

「我ハ王デハナイ。
故ニ、ドノ王ノ生キ様モ、
肯定スルコトモ否定スルコトモ出来ハセヌ。
三人ノ王ノ在リ方ハ、ドレモ正シイノデアロウ。」

「・・・」

「王トハ孤独ナ存在デハナイカ？
常ニ家臣カラ機嫌ヲ伺ワレ、無イ腹ヲ探ラレル。
頼ミ事ヲスレバ、言葉一ツデ命令ニ変ワル。
汝ガ、我が主ヲ友ト呼ブノナラ、
友ノ前クライハ、モット気楽ニ話シタラドウダ？
ソレト・・・」

ハサンが扉に近づき、扉を開けた。

「以前二モ言ッガ、盗ミ聞キハ、モウ少シ上手クヤレ。」

今度はギーシュが転がり込んでくる。

「ハ、ハ、ハサン殿。」

貴方、姫様になんてことを言ってるんですか!？」

「小僧。モウ1度、『SHI☆DO☆U』シテヤロウカ？」

「!!」

ナンデモアリマセン、スイマセンデシタ。」

「あら、貴方は？」

「私めは、グラモン家の4男。」

ギーシュ・ド・グラモンと申します。

姫様、まことに申し訳ありませんが、お話は聞かせていただきました。

アルビオンより手紙を入手すればよいのですか？」

「ええ、そうです。お願いできますか？」

「ははっ。このギーシュめにお任せを。」

「では、ルイズ、ハサンさん、ギーシュさん。

アルビオンから手紙を取り返してきてください。

この通りです。」

アンリエッタはそう言って頭を下げた。

「姫様、お顔をお上げください。手紙は必ず、取り戻してみせます。」

「ありがとうございます。」

ルイズ、貴女にこれを。

この手紙と、この指輪をアルビオンのウェールズ皇太子に見せれば件の手紙を渡してもらえる筈です。」

「姫様、確かにお預かりしました。」

「ヤレヤレダ。」

「それから、念のために護衛を1人付けましょう。私に出来ることといえば、これくらいなのですが。」

「要ラン。人数が増エルト、カエツテ目立ツ。」

本来ナラ、小僧モ留守番ヲサセテイルトコロダ。」

「ですが・・・」

「友ヲ想ウノナラ、頼マレヌ限り余計ナコトハセヌコトダ。ソレトモ、友ヲ信用シテイナイノカ？」

「うっ」

「姫様、護衛を付けてください。これなら良いわね、ハサン？」

「良イ。」

「わかりました。護衛を1人付けることにします。
改めて、お願いします。」

「杖にかけて」

姫の依頼（後書き）

試行錯誤中。いつもと書き方を変えてみたつもりですが、どうなん
だろ？

3人の王の生き様は、完全に俺の意識です^^；

中間地点 岩の街（前書き）

一身上の都合により、2週間ほど休載します。
個人的な都合ですので、続きを楽しみにしていただいている読者の
方々にはご迷惑をおかけします。

中間地点、岩の街

翌日の朝、ルイズ、ハサン、ギーシュの3人は学院の前でアンリエッタが手配した護衛を待っていた。

「ルイズ、君がハサンさんと行くんだったら、僕も使い魔を同行させたいのだが、いいかな？」

「アンタの使い魔って、何だっけ？」

「おいで、ヴェルダンディ。」

モコモコ。

大きなモグラがルイズの足元からあらわれ、ギーシュに飛びつく。

「この子が僕の使い魔、ベルダンディさ。」

ギーシュにじゃれついていたモグラが鼻をヒクヒクさせると、今度はルイズに飛びついた。

「きゃ、何なのよ？」

「ベルダンディは宝石が大好きだね。どうやら、君が持っているルビーに反応したようだ。」

「これは姫様から預かった大事なものの。このバカモグラ~~~~~。」

ルイズがベルダンディから離れようともがいていると

「危ナイ、主！！」

何かがルイズの前に立ったハサンに当たる前に消えた。

「何者ダ！？」

「僕の可愛い婚約者が襲われているようだったのでね。」

上から声がした。

「久しぶりだね、僕のルイズ。」

驚頭獅子グリフォンに乗った誰かがそんなことを言った。

「ワルド様！？どうして、このような場所に？」

「あれ、聞いてないのかい？」

姫殿下から君達の護衛を言い付かってね。」

「主ヨ、コノ者ハ？」

「ハサン、貴方は知らないかったわね。

この方は、ワルド子爵。私の婚約者よ。」

「ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ。
よろしく、使い魔君。」

「『ハサン』ト申ス。貴殿ガ最後ダ。」

出発スルトシヨウ。」

「ああ、遅れて悪かったね。
ルイズ、君は僕のグリフォンに乗るといい。
使い魔君はその少年と一緒に来るんだ。」

「断ル。我ハ主ノ使イ魔ダ。
主ヲ守ルノハ、我ノ役目ダ。
貴殿ガ小僧ト共ニ行ケ。」

「ルイズ、君はどちらと一緒に行きたい？」

「ハサン、ワールド様の言うとおりにしなさい。」

「了解ダ、主。」

小僧、馬ハ返シテ来イ。
ぐりふおんデ向カウノデアレバ、馬デハ追イツケン。」

ハサンに言われ、ギーシュは馬を返しに行った。
それを見ながら、ワールドは尋ねた。

「馬でなくては何で向かうのかね？
君の言い方はまるで『グリフォン並に速い移動手段がある』ようだ
が？」

「ハサンさん、返してきました。」

「ゴ苦労ダッタ、小僧。『妄想変身』」

ぷしゅ~~~~~

煙が晴れると、いつぞやの両目に眼帯をした長身の女性が現れる。

「では、行きましょう。」

「あなたって、この間の御者の人よね。」

馬も馬車も無いのに、御者になってどうするつもりよ？」

ルイズが尋ねると

「問題ありません。」

と、鎖の付いた杭のようなものを取り出し、
首に当てると・・・

ザシュッ！！

なんの躊躇いも無く、自分の首を切り裂いた。

「!？」

と、ルイズが声にならない声を出そうとしている。
すると、飛び散った血から翼を持った白馬が出現した。

「この子ならグリフォンに遅れを取ることはないでしょう。
少年、乗りなさい。」

ペガサスに乗るようにギーシュを促し、乗せる。

「では、行きましょう。ワルド殿、先導をお願いします。」

「あ・・・ああ、こっちだ。」

グリフォンが先導し、ペガサスが後に続く。

道中、妨害はまったく入らず、一行はラ・ロシエールに到着した。

「さて、ここから飛行船でアルビオンに向かうのだが・・・」

「何カ、不都合デモ？」

「アルビオンは浮遊大陸でね。」

平時はここから飛行船で向かうのだが

今は戦時で向かう船は先程出たばかりらしいのだ。

次の便は2日後という話だ。」

「補給船ナド、他二あるびおんニ向かう船ハ無イノカ？」

「今、それを当たっているところだ。」

見つかったとしても、今日中に出発するのは無理だろう。

そこでだ、今日はこの街に宿泊するでしょう。

明日なら、船も見つかるだろう。」

そう言って、ワルドは宿屋に案内する。

「ここだ。部屋割りは僕とルイズ、使い魔君と少年で良いかな。」

「却下ダ。我ガ主ヲ護衛スル。貴殿ハ小僧ヲ守ルガイイ。」

「ハサン！！」

ワルド様、私はそれでかまいません。

ハサン、貴方はギーシュを守りなさい。」

「主ガ良イノナラ、ヨカロウ。」

「使い魔君。君は一々、僕のやる事が気に入らないようだね。そこまで言うのなら、君の実力を見せてくれないか？」

「ヨカロウ。ドウスレバヨイ？」

「簡単なことだ。僕と決闘してくれないか？」

「朝ノ攻撃カラ察スルニ、貴殿ハ風ノめいじデアロウ？
ナラバ、決闘ハ無意味ダ。」

風ノめいじデハ、我ニハ勝テヌ。」

「決闘という言葉を出してしまった以上は、僕は引けないのでね。
無理にでも付き合ってもらおうよ。」

「知ツタコトデハナイ。」

「だったら、僕も君をルイズの護衛として認めるわけにはいかないな。」

「・・・ヨカロウ。」

行クゾ、ぐりふおんノ騎士ヨ。ココデりたいあスル覚悟ハ十分カ？」

ハサン対ワルド（前書き）

お待たせしました。

ハサン対ワールド

ハサン、ルイズ、ギーシュの3人を連れたワールドは小さな道の先にある

広場と呼ぶには狭い場所で足を止めて振り返った。

「ここでは昔、よく決闘が行われていたと言うよ。」

そんなワールドを無視して

「小僧。」

「は、はいっ!!」

「貴様トイイ、腰抜ケトイイ、コノ髭トイイ・・・
貴様ラ貴族ハ、無駄ナ決闘ガ趣味ナノカ？」

「いっ・・・いえ、むしろ決闘は禁じられています。」

「でも、禁止されているのは貴族と貴族の決闘。

貴族と平民の決闘は禁止されていないのさ。」

無視されたワールドがハサンとギーシュの会話に割り込む。

「さて、決闘する以上は誰が相手でも名乗るのが礼儀だね。

僕の名はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワールド。

グリフォン隊隊長にして、二つ名は『閃光』。

いざ、勝負。」

「ナラバ、コチラモ名乗ルトシヨウ。

我が名ハ、ハサン・ザーバツハ。

暗殺者ノ原点ニシテ、

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール殿ノ
使イ魔ナリ。

小僧、決闘開始ノ合図ヲセヨ。」

「はっ、はい!!! では、はじめ!!!」

ギーシュが言い終わると同時に

「偏在!!!」

ワルドが4人に増え、ハサンを囲む。

しかし、ハサンは

「分身力。ナラバ・・・

妄想変身、妄想分身。」

ハサンが煙に包まれると、ハサンが8人に増えた。

「僕以上に偏在を出せるとは、なかなかの使い手だ。
でも、人数だけでは勝てないよ?」

「御託ハイイカラ、カカッテコイ。」

「「エア・ハンマー!!!」」「「エア・カッター!!!」」

挑発されたワルドが2人ずつ、風の魔法を放つ。

しかし、それらは全てハサン達に当たる前に消えてしまった。
効果が無いようだ。

「今朝のは外したのかと思ったのだが・・・
どうやら、本当に消されているようだね。

だったら、これはどうかな? ブレイド!!!」

4人のワルドの杖の先から、白い光が伸び、
ワルド達はハサン達に向かって突進していく。

が、刃が届く前に8人のハサンは全て消えていた。

「くっ、どこだ!？」

「妄想変身」

声が聞こえると、ワルドの前に長い剣のような物を構えた男が立っていた。

「嵐三連!!」

声と同時にワルドの1体が斬られて消えた。

「君は・・・」

いや、君も使い魔君かな？」

「いかにも。今のこの身は暗殺者のサーヴァント、佐々木小次郎。いざ、尋常に・・・勝負!!」

「姿を変えるとは、面白いよ、使い魔君。」

3人のワルドが小次郎に向かって刃を振るう。
しかし、小次郎は慌てる風でもなく、剣を構え

「秘剣・・・燕返し!!」

3人のワルドに一閃ずつの剣閃が走り、それに斬られたワルドが2人消える。

「ほう、速いね。」

本体だけになったワルドがそう呟く。

「戯れにな・・・」

小次郎が何を言うのか。皆は興味深げに耳を傾ける。

「飛んでいる燕を斬ろうとした。来る日も来る日もな。

1筋では斬れず、2筋では逃げ場があった。

3筋目で逃げ場をなくして、ようやく斬れた。それだけだ。」

「一瞬で3度、剣を振るうのか。それはたしかに避けれまい。」

どこか楽しそうにするワルド。そして

「はっはっはっ。僕の負けだよ、使い魔君。

僕では君に勝てそうも無い。」

「ダカラ、言ッタデアロウ。無駄ダト。」

いつものハサンに戻ったハサンが、ワルドに追い討ちをかける。

「いやいや、なかなか有意義だった。

僕もまだまだ未熟だったということさ。

それが分かっただけでも負けた価値はある。」

ワルドはそう言って、笑うのをやめない。

そして

「約束だ。僕も君の命令に従おう。」

「ソナナ約束ハ、シテオラヌ。」

「君ならルイズを守りきることができる。

それこそ、僕なんかより遥かに安全にね。

だったら、喜んで君の指示に従おうじゃないか。」

そう言ったワルドは、どこか嬉しそうだった。
そんなワルドを連れて、一行は宿屋に戻った。
部屋割りを変更したのは、言うまでも無い。

ハサン対ワルド（後書き）

誰に変身するか、いろいろ考えてたんですけど、暗殺者で剣士なので小次郎にしました。

他も考えてはあるんで、リクエストがあったら書こうと思います。

思うだけで、俺の文章力で書けるかどうかは別ですけど・・・

アルビオン到着、そして王宮へ（前書き）

ネタでゼロ魔もう1つ書こうか　とか思ってたら1週間過ぎてました。

アルビオン到着、そして王宮へ

決闘の翌日、ワルドが声をかけておいた商人の1人が飛行船を出すというので、一行は船乗り場にいた。

「貴族様、狭い船ではございますが何卒、ご容赦を。」

「いや、いいよ。無理を言ったのはこっちだからね。感謝してるくらいさ。」

「そう言っていたら、手前どもとしましても嬉しい限りです。それはそうと、貴族様。」

最近、アルビオン周辺に空賊が出没するのはご存知ですか？」

「いや、それは知らなかったな。」

「アルビオンに向かう船だけを襲っているようなのですが・・・万が一の時は、お願いできませんでしょうか？」

「無茶を聞いてもらったのだ。それ位はやろうじゃないか。なあ、使い魔君。」

「何故、我ニ同意ヲ求メル？」

「なに、まともに戦えるのは僕と君だけだろう？それとも君は、ルイズを危険な目に合わせるのかな？」

「ソナナ分ケが無カロウ。主ダケハ守ルガ、アトハ貴様ガ守ッテヤ

レ。

ソレ位ノ力量ハアルダロウ？」

「つれないねえ。僕は君を高く評価しているんだけどね。」

「知ツタコトカ。オイ、小僧。」

「は、はい！！」

「分カッテイルトハ思ウガ、ココカラ先ハ戦場ダ。死ニタクナイナラ、今カラ帰レ。」

「そんなあ。僕だって姫様の命を受けたんですよ？

同じ立場のルイズが行くのに、どうして僕はここで引き返すんですか。」

「貴様が一番足手マトイダカラダ。

ソレニ貴様が死ンデシマッタラ、貴様ノ家族ハドウナル？

オ世辞デモ、アノ姫ガ、貴様ノ家族ニ何カシテヤルトハ思エンゾ。」

「はっはっはっ。手厳しいな、使い魔君。

ギーシュ君だったね？ 僕もハサン殿の言うとおりで、君が帰ることに賛成だ。

ここから先は、正に命懸けになるだろう。

正直に言うと、僕はルイズにも一緒に帰ってもらいたいんだ。

でもね、ルイズが帰ってしまうとハサン殿も帰ってしまうだろう。

そうなってしまつては、この計画が成功することはない、と断言できる。

だから、ルイズは連れて行く。もちろん、全力で守るけどね。」

「わかりました。でも、皆さん無事に帰ってきてくださいね。」

「ああ、約束だ。」

「わかったわ、また学院で会いましょう。」

「当然だ。」

こうして、一行はギーシュを学院に返しアルビオンへと向かった。道中、商人達が心配していた空賊に会うことも無く・・・そして、アルビオンに到着した一行は、ハヴィランド宮殿がある王都ロンディニウムへと飛んだ。

「何物だ、止まれい!!」

「僕たちは、トリステイン王国王女アンリエッタ様の使いの者だ。こちらに居られる、ウェールズ皇太子にお会いするべく参上した。皇太子殿下に、お目通りを願いたい。」

そう言って、ワルドはルイズに手紙を見せるよう促す。

「ふむ、たしかにトリステイン王国の紋章。

だが、貴公等が偽者であるとも限らん。
したがって、会わせることなど出来ん。」

「ソチラノ言イ分ニモ一理アル。

ダガ、貴様ノ一存デ決メテモ良イノカ？」

「何が言いたい!？」

「貴様ハ確カニ、職務ヲマツトウシタダケダロウ。

ダガ、ソノセイデ国ガ滅ビルヨウナ事態ニ陥ツタ場合、

貴様ハ、ソノ責ヲ負ウコトガデキルノカ？」

「ぐっ、だが・・・」

「トリアエズ、皇太子ヲ連レテ来イ。

臨機応変ニ対応スルコトモ重要ダゾ？

ソレトモ、タカダカ3人ガ怖イノカ？

ダツタラ、護衛モ連レテ来イ。」

「ぬ、わかった。おい、誰かウェールズ様に連絡を。」

「やるねえ、使い魔君。」

「会ワンコトニハ、話ハ進マヌ。

話ガ進マヌウチハ、此処ニ居ルコトニナル。

ソウナルト、主ガ危険ダ。」

「成る程ねえ。」

そんな会話をしていると、ウェールズが護衛に囲まれてやってきた。

「僕がウェールズだ。

なんでも、私の従妹からの使者だということだが・・・？」

「信用されていない場合、この指輪を見せれば良いということでした。

まずは、この指輪をご覧ください。」

そう言って、ルイズは水のルビーを出した。

それを見て、ウェールズも指輪を出す。

すると、2つの指輪の間に虹がかかった。

「水と風は互いに惹かれて虹を成す。

君たちは本物の使者殿のようだ。

それで、どのような用件かな？」

「それにつきましては、アンリエッタ王女から手紙を預かって参りました。

こちらをご覧ください。」

手紙を受け取り、一心に読み続けるウェールズ。やがて、

「そうか、僕の従妹は結婚するのか。」

「・・・はい。それで手紙を返して欲しいとの事でした。」

「この手紙にもそう書いてある。あとで渡すでしょう。

ああ、こんな時で悪いんだが、君たちもパーティーに参加しないか？」

「パーティー・・・ですか？」

「明日、僕たちは最後の戦いに向かう。

その為のパーティーさ。」

「わかりました。謹んで参加させていただきます。」

「ワールド様!？」

「ルイズ。僕はね、ここで言うべきことがあるんだよ。」

主だった人が集まるんだったら、尚更言うべきことがね。」

「ワルド。貴様、何カ吹ッ切レタヨウダナ？」

「・・・ああ。君にも感謝してるよ。」

ウィンド

パーティーが始まって、ワルドが打ち明けた話は
その場に居た王族派の貴族には衝撃的なものだった。

「ワルド卿。貴公は、レコンキスタに所属しておったのか。」

「はい。」

「しかも、レコンキスタの盟主クロムウェルは、
死者を甦らせる魔法が使えると？」

「はっ、その通りでございます。」

その言葉に皆がざわめく。

死んだ後は敵に回ると言われたようなものだ。

落ち着けというほうが無理だろう。

たった1人を除いては。

「ワルド、確認シテオキタイコトガアル。」

「なぜ、僕がこんな時に、

わざわざ自分に不利になるようなことを言ったのかい？」

「ソナナ事ハ、ドウデモイイ。

我が確認シタイノハ、生き返ッタ死者ニ
ソノ者ノ意思ガアツタカ、否力。ダ。」

「ふむ・・・いや、無かったと思う。」

「何故、ソウ判断シタ？」

「生き返った、と言うのは、

おそらく君みたいな存在を言うのだろうね。

一度死んで、再び自我と肉体を得た存在を。」

「ソウイウ意味ナラ、確カニ我モ死人返リダナ。」

「クロムウエルの魔法・・・いや、魔法具では
肉体は生き返ったが、自我は無い。

君を見て気づいた。アレは生き返るんじゃない。

死体を操ってるだけだ。アレは、死者に対する冒瀆だ！！」

「死体ヲ操ルダケ、カ。

ナラバ、ヤリヨウハアルナ。」

「使い魔殿、何か策があるのですか！？」

「アア、簡単ナコトダ。操ラレタ死体ヲ乗ッ取レバ良イ。」

「ハサン？」

「我が主ノコトダ。オソラク、我ニ何トカセヨ、ト命ジルダロウ？」

「うっ。ま、まあ、そう言うつもりはあったけど・・・」

「ダッタラ、主ヨ。我ニ命ジヨ。

くろむうえるヲ討チ取レ、トナ。

我ハ、主ノ望ムママニ行動シヨウ。」

「・・・ハサン。貴方のことだから、
今更、何をされても驚く気はないけど
今回は何をする気なの？」

「マア、見テイルガイイ。皇太子殿。」

「ん？どうした？」

「我以外ノ人間ヲ全テ、此処カラ避難サセヨ。
今スグニダ。」

「は？」

「我が何トカスルカラ、今スグ逃ゲロ。
ト言ツタノダ。
ソレカラ、ワルド。」

「何かね？」

「甦ツタ死者ノ人数ハ？」

「僕が最後に見たときは、20〜30人だったと思う。
それから増えていたとしても50人は居ないだろう。」

「ナラバ、勝算ハアル。ソレト、皇太子殿。
くろむうえるヲ討チ取ルタメニ、皇太子殿ノ姿ヲ借りタイノダガ
許可ヲ貰エマイカ？」

「スキルニルでも使うのかい？だったら、誰かナイフを。」

「ソノ必要ハ無い。我ハ、出会ッタ事ノアル者ニ
姿ヲ変エル事が出来ル。」

「どうやら、面白そうなことをするようだね？」

「此度ノ一件、全テガ終ワツタラ説明シヨウ。

ソレニ、とりすていん ニ逃亡スルノニ

皇太子ガ生キテイテハ、マズイダロウ？

あるびおんカラ亡命シテキタ者ノ中ニ、

●●●偶然、皇太子ニヨク似タ者ガ居ルカモシレンガナ。」

「ああ、成る程ね。だったら、僕は何者になるのかな？」

「あるびおん ハ戦火ニ卷キ込マレル。

ソノ戦火ヲ消スノガ貴殿ノ役目トナロウ。

ナレバ貴殿ハ、今シバラク、コウ名乗ルガヨイ。

『火消しの風』ト。」

「風のルビーを持ち、風のメイジである

僕に相応しい偽名だ。

だったら、僕の従妹はさしずめ、『救いの水』かな。」

「好きニ言ッテイルガイイ。最後ニ、我が主ヨ。」

「な、何？」

「くろむうえるヲ倒スノハ良イノダガ・・・」

髑髏の仮面が嘲った気がした。

「ツイデニ、
れ●
こ●
ん●
き●
す●
た●
ゴ●
ト●
倒シテシマツテモ構ワシノダロウ？」

ウィンド（後書き）

ドラマCDみたいだ　と感想で書かれました。
言われてみれば、そうかも。と納得。

楽しんでもらえれば幸いです。

荒城のアルビオン（上）

翌日、アルビオンは不気味なほど静かだった。

そんな中、城を目指す集団があった。

レコンキスタ。

それは虚無の力を以って聖地を奪還せんとする集団。

集団、いや軍団は目指す城に着く。

そこには黒い帽子に黒い服を纏った、3歳ほどの少年が居た。

そして、少年は一言だけ呟いた。

「死^{パーバ}して尚、父^{お家に帰ろう}を求める幼子の言霊」と。

それは、純粹な願いだった。

旅の途中で大好きだった父親とはぐれ、死に、それでも父親を探し続けた少年。

その一念は、キョンシーと呼ばれる死者を魅了するまでになった。

しかし、少年もまたキョンシーと呼ばれる『動く死体』。

幼かったが故に悪心を持たず、彼は死してなお意思を持ち続けた。

意思を持たぬ『動く死体』の中で唯一意思を持つ彼は、

意思無き『動く死体』の代弁者。

少年はいつしか、こう呼ばれるようになった。

死に別れた父親の死体を探す幼きキョンシー、『ベビーキョンシー』と。

幼くして死んだ少年自身は闘うことはできない。

その代わり、ほぼ全ての『動く死体』が彼の代わりに闘う。

彼は意図せずして自らを守る術を得ていたのだった。

少年が呟いたその一言で、いたる所から悲鳴が上がる。

クロムウェルによって蘇生させられていた者達が、一斉に反旗を翻

したのだ。

ある者は魔法を放ち、又ある者は手近に居た者に斬りかかる。戦場は混乱に巻き込まれつつあった。

「こ、これは一体!？」

本陣とも言うべき最後尾にある部隊で采配を振るうべく待機していたクロムウエルにもたらされた報告は

彼にとって、あり得ないものだった。

彼が蘇生させた死体が、例外なく味方を襲っているというのだ。

アンドバリの指輪で必死に死者の制御を試みるも、

効果は無く、そうしている間にも被害は増える一方だ。

「ええい、仕方ない!!」

クロムウエルは死体を制御するのを止め、

洗脳した者、心酔している者など、

生者に死者の駆逐および城攻めを命じた。

ほどなくして、

死者の殲滅完了。

開城に成功した。

城の中には死体があった。

アルビオン王、および皇太子戦死。など、クロムウエルの望む報告がある。

報告に満足したクロムウエルは数人の腹心を伴って入城した。

「玉座というのは、座り心地が格別ですね。」

そう言って自己満足に浸る。

しばし悦に入ったクロムウエルは、何かを思い出したかのように立

ち上がると

「ウェールズの死体はどこです？

あれには、有効な使い方がありませんから
持ってきてください。」

その声を聞き、2人の兵が1つの死体を持ってくる。

「ウェールズ、君にはまだまだ役に立ってもらいますよ？」

そう言うと、アンドバリの指輪を使おうとした。

その時だった。

「貴様如キニハ・・・

コノ身モ、コノ国モヤレンナ。」

そう言って、死体、いや死体だった物が立ち上がった。

荒城のアルビオン (上) (後書き)

キョンシー

人の魂は7魂3魄から成り

「魂勝れば人と成り、魄勝れば鬼と成る」とされている。

注…この場合の鬼は悪魔、妖怪の類を指す

不慮の事故、殺人、キョンシーに殺害される。などにより
天寿をまっとうできなかった場合、

魄だけが死体に残り、キョンシーになる。とされている。

年を経たキョンシーは死後硬直が解け、関節も曲がるようになる為
生前に得た武術を使うことも出来る。らしい。

余談だが、作者は幼稚園の頃に金○ロードショーで初めて見てトラ
UMAになった。

ベビーキョンシー

死体を操る能力を持つ存在として、

作者の脳内会議によって、6次キャスターに選ばれた英霊。のよう
な存在。

映画では悪戯好き、日光が平気、石を投げる、

制御されているされてないを問わずキョンシーを連れ去る (一部

除く) など、

かなり、やりたい放題やっている。

ちなみに、子供が好きで、サングラスをかけることで日中も出歩く。
恩を忘れないらしく、自分の世話をしてくれた道師には、かなり懐
いていた。

宝具

死パーバして尚、父お家に帰ろうを求める幼子の言霊

A

キョンシーというより、『リビングデッド動く死体』を操る能力。

ただし、凶暴性が増し、自我のようなものを持つ古いキョンシーには無効。

死に別れた父親のキョンシーを探すうちに、ベビーキョンシーが得た言葉。

キョンシーは『動く死体』である為、同じカテゴリーに属するゾンビなどにも有効。

また、同じカテゴリーでも、

自我を持つ『動く死体』である真祖級の吸血鬼には無効だが、意思を奪われた使徒級の吸血鬼には有効。

荒城のアルビオン (中) (前書き)

亀投稿な上に、読みづらい片言のハサンを受け入れてくれている読者の方々に感謝。

実は、書く方も書きづらいんです。

まあ、妄想変身すれば普通に喋りますけど。

荒城のアルビオン（中）

クロムウエルは狼狽した。

ウエールズの死体が動き、喋ったのだ。

しかし、それは死体でもウエールズでもなく
不気味な仮面をつけた男だった。

「き、貴様は誰だ!？」

恐怖を払拭するかのように声を荒げる。
すると・・・

「ブロウクン ファントム
壊れた幻像」

男が眩くと同時に、城のあちこちから爆音が響く。

城に放置されていた死体だった物が、連鎖的に爆発したのだが
クロムウエルには知る術も無い。

「貴様、誰だ!？」

一体、何をした!？」

クロムウエルがさらに声を荒げる。

「我ハ『ハサン』・・・『ハサン・ザーバツハ』。

只ノ通リスガリノ暗殺者ダ。

アア、別ニ覚エナクテモイイゾ。

やまノ文帖ニヨルト、貴様ノ死ハ確定ラシイ。」

「曲者だ。出会え、出会えええい!!」

そんなクロムウエルをよそに、ハサンは告げる。

「ソレト、質問ニ答エテオコウ。

何ヲシタカ、ダッタナ？

死体ヲ爆破シタダケダ。」

「私の城を爆破しただと！？」

「戯ケタ事ヲ言ウナ。貴様が建テタ城デハナカロウ？

ソレニ、持チ主ノ許可ハ得テアル。

聞キタイコトハ、ソレダケカ？

ダッタラ、モウヨイナ。

下ラヌ妄想ヲ抱イテ溺死シロ。」

—願いは理想でできている

—I am the born of my hope

ハサンとクロムウエル、それに数人の護衛しか居ない空間に声が響く。

—我等は一で、我は全

—I wish be my self, and hope i
s my own

大きいわけではなく、しかし、どこか響くような声。

―幾度も闇を纏って迷走

―I have killed over a thousand
of selves

心の底を揺さぶられるような、震えのくる声。

―願いは一度も叶うことなく

―Unknown of hell

クロムウエルの声に反応した兵士達が、ようやく駆けつける。

―祈りは誰にも届かない

―Nor known of heaven

しかし、彼らも声の異常さに気づいて立ち竦む。

―偽りの姿を借りながら

―I had a dream

異常に気づいても、何も出来ない。

―この世の全てを欺いて

―That I will be myself

一つの声が二重に重なって響いていることも

一我は確かに此処に在る

—But we are never hold anything
g

この空間においては、正常なだと本能が告げる。

一刮目せよ

—So, this is only my own

最後の一節は、

一真・妄想変身!!

—Zabab-Nya

それまで以上に大きく聞こえた。

声が収まると、そこには1人の青年が居た。

明らかに異常と思えるほどの殺気を放つ青年が。

そして、クロムウエルをはじめ

その場に居た全員が本能で理解する。

一アレは自分たちを獲物としか見ていない殺戮者だ一と。

怯える者達に、更なる恐怖を与えるように青年は告げた。

「吾は面影糸を巣と張る蜘蛛。

ようこそ、この素晴らしき惨殺空間へ。」

荒城のアルビオン (下)

そこは青年が宣告したように、惨殺空間と呼ぶに相応しい空間だった。

青年が腕を振るえば肉片が舞い、足で蹴り上げれば肉塊が飛ぶ。

魔法を使おうとした者からの確に襲い

杖を持つ手が、ただの肉に変わる。

青年が走るだけで、進路にいた者達は

肉を斬られ、骨を断たれ、あるいは骨髓すら折られる。

そこにあるのは、ただ一方的な蹂躪。

5分と経たないうちに、クロムウエルと青年以外に動く存在は無くなった。

そんな悪夢のような光景のなか、動くこともできなかったクロムウエルに青年はさらに告げる。

「運が良かったな。

大凶にあたるなんて、選ばれた人間の証だよ。」

「ひいっ!!」

そんな選ばれ方は嫌だ と叫びたかった。

たとい無様だと言わようが、

靴の底を舐めててでも生き延びたい。

そんな思いさえ頭をよぎった。

しかし

「行き先は決まったか？」

地獄に落ちたら、閻魔によろしく言っといてくれ。」

東洋人ではないクロムウェルに閻魔というのが何かは分からない。ただ分かるのは、目の前の青年によって自分が殺されるということだけ。

青年はゆつくりと近づくと、腕を振るった。

「ぎゃああああっ！」

「おいおい、腕が一本なくなった程度で騒ぐなよ。手元が狂うじゃないか。」

青年は笑いながら、クロムウェルの左腕をぶら下げてそう話す。

「ああ、そもそも覚悟が足りないんじゃないのか？本気で革命を起こすのなら、腕の一本や二本、無くなっても構わないって覚悟が必要だろう？」

そう言って再度腕を振るう。

今度は右足首が肉塊になった。

「痛覚はまだ生きてるか？

脊髄はまだ存命だな？

脳漿は零れてないよな？

そうか、いい子だ。

息耐えるまでの空白を、絶望で走り抜けろ。」

続けて、右手首が床に落ちる。

「今のは、お前の下らん革命のせいだ

手を煩わせることになった俺の分。」

さらに腕を振るい、クロムウエルの左手を刻む。

「今のは、こんな所まで来さされた俺の手間賃。」

「今のは、俺を楽しませてくれた代金。」

「これは・・・」

「今度は・・・」

「これが・・・」

「忘れるところだった。これは・・・」

・
・
・

クロムウエルはまともに聞いていなかった。

否、あまりの痛みに思考すら拒否した状態だった。

目は何も写さず、鼻は充滿する血の臭いで麻痺し、耳は何かの音を拾うだけ。

喉は叫びすぎて声どころか音すら出ない。

まともに動いているのは心臓のみ。

傷が多すぎて出血死するのも、もはや時間の問題だろう。

「死に際に微笑まぬ者は生まれ変われぬという。

まあ、いつかは死ぬんだ。

ここで死んでも大差はないだろう？」

それがクロムウエルが最後に聞いた声^{おと}だった。

「これが、死者ヲ操ッテイタトイウ指輪力。」

ハサンの姿に戻ると、転がっていた右手首を拾い上げ指輪を抜き取

る。

「一応、回収シテオクカ。

誰カニ拾ワレテ使ワレタラ面倒ダ。」

抜き取った指輪を懷に仕舞い

「話ニナラン。来世カラ、ヤリ直スノダナ。」

クロムウエルの死体を一瞥し、そう言う
とハサンはハヴィランド宮殿から姿を消した。

荒城のアルビオン (下) (後書き)

ハサンを変身させすぎ というお叱りを頂きました。
自己弁護させていただと、

死体に化ける⇒クロムウエルに近づく⇒そのままクロムウエル暗殺
⇒アルビオン編完

って、あっけないじゃないじゃないですかW

考えなかったわけじゃないんですけど、会話含めても1000字位で
終わったんで
流石に止めました。

事後処理 之一（前書き）

ヒロインに出てきて欲しい というご意見をいただきました。
そこで、アンケートをとりたいと思います。
感想の一言にでも書いてください。

原作キャラをヒロインにという方は、キャラ名を記入してください。
（無記名の場合、無効票とします）

オリジナルヒロインを希望の方は、「オリジナルヒロイン希望」と
記入してください。

希望する性格がある場合、書いてくださっても結構ですが、
反映できるかどうかは分かりません。

ハサンに恋愛など不要！！ という方は、「我々2年F組、異端審
問会！！」と記入してください。

すいません、嘘です。「ヒロイン不要」だけで構いません。
万一書かれてても有効にしますけど。

×…12月17日23…59 それ以降は全て無効票として扱
います。

なお、集計結果が同数の場合はヒロイン不在となります。

2010.12.17 00..00

原作…1票 オリジナル…0票 不要…1票

ヒロイン不在に突入か！？

事後処理 之一

ハサンに城から脱出するよう指示されたウェールズ達は夜中のうちに城から脱出していた。

もちろん、ルイズとワルドも一緒である。

「ハサン、大丈夫かしら？」

「君の使い魔君なら、問題ないだろう。」

「ハサン殿にも、何か考えがあるんだろう。」

機動力に優れるということで、ワルドのグリフォンに3人乗りしているが

グリフォンも無理なのか、本来の移動速度よりも遅い。

それでも馬より速いのは、流石は幻獣といったところか。

一行は一路、軍港ロサイスへ向かっている。

もつとも、ロサイスに到着したところで

即座にラ・ロシエールに向かえるわけはなく

ましてや、飛行船に乗れるとも限らないのだが、

ハサンに指示されたようにアルビオンから脱出するには

ロサイスに向かうしかなかった。

ロサイスに着いたのは夜明け前だった。

屈強な男達、いや、マッチョな漢達が

飛行船に風石を積み込んでいる。

「ありったけの船を準備しろ。

僕たちの船も使えんだ。」

私物は置いて、とにかく人数を乗せろ。
また、貴族よりも民間人を優先するんだ。」

ウェールズが指示し、そこに居た者がそれに従う。

「ウェールズ様、風石が足りません。」

「ラ・ロシエールに到着したら、訳を言って風石を分けてもらえ。
何往復しても良い。とにかく避難を優先させろ。
場合によっては、ラ・ロシエールで飛行船を手配しろ。
金に糸目をつけるな。」

「第一便、出港できます。」

「第一便は出港しろ。
出港準備の整った船から順次出港だ。
僕は最後の船に乗る。」

「了解。出港!!!」

そうして、準備の整った船が飛んでゆく。
昼ごろになって、偵察に残った竜騎兵から情報が伝わる。

「いきなり同士討ちを始めただど!?!」

「はっ。何やら声がしたと思ったのですが
その直後に、反乱軍より火の手が上がってありました。」

「報告します!!!」

反乱軍は離反した者達を制圧。
城内に侵入いたしました。」

「報告!!」

城内より爆音。何者かが城を爆破したものだと思われます。」

続々と情報が伝わる。

と同時に不安にかられる。

しかし、ワルドは笑いをこらえた顔をしている。

一人城に残ったハサンの主人であるルイズはという情報とは逆に安心したようだ。

「お二人とも、何故そんなに安心していられるのですか？」

「失礼いたしました。」

同士討ちくらいはやるだろうな、とは思っていたのですが、まさか、城ごと爆破するとは思いませんでしたので。

しかし、それならクロムウェルも助からんでしょうな。」

「ワルド卿の仰るとおりです。」

それに、私の使い魔はスクウェア以上の能力を持っていますので。」

さらっと凄いことを言う。

「報告!! 何者かがペガサスにて近づいて参ります。」

という報告が聞こえたのと同じタイミングでいつものハサンが現れた。

「ナンダ、マダコンナ所ニオッタノカ？」

「ハサン!!」

「無事だったかい、使い魔君？」

「ハサン殿!!」

「ソウ一度ニ喋ルナ。マズハ主ニ報告ダ。

敵ノ首魁、くろむうえる　ハ討チ取ッテキタ。

首魁ヲ失ッタ　れこんきすた　ハ何モ出来ヌダロウ。

ソレト、知ラヌ者ニ拾ッテ使ワレテモ困ルノデナ。

件ノ指輪トオボシキ物ハ回収シテオイタ。

以上ダ。」

「そう。ご苦労様、ハサン。」

「質問いいかな？」

「何ダ、髭。」

「どうやったんだい？」

「少なくとも見積もっても3万は居ただろう?」

皆、同じ事を尋ねたいのか黙ってハサンを見ている。

「アア、マズハ死体ヲ操ッテイタノデ操り返シタ。

カナリノ人数ガ死体ダッタヨウダナ。

制圧サレタ頃ニハ、ダイタイ　1／3　（3分の1）　ガ減ッテイ
タ。」

「本当に規格外だね。

こちらの想定の斜め上を走ってるよ。」

「ソノ間ニ分身ヲ作り、死体ニ化ケテオッタ。

案ノ定、くろむうえる　ノ方カラ近寄ッテキタノデナ

トリアエズ、護衛ゴト皆殺シニシテオイタ。
アア、見ニ行クツモリナラ、死体ヲ見ル時ハ覚悟シテオケ。
念入りニ惨殺シテオイタカラナ。」

「城が爆破されたと聞いたんだが、説明していただけますか？
ハサン殿。」

「くろむうえる ヲ待ツテイル間ニ作成シタ分身ヲ自爆サセタ。
あれデ少ナク見テモ、500人程ハ戦闘不能ニナツタダロウナ。」

他人事のように言うハサン。

実際、怪我をしたのはレコンキスタの兵なので
ハサンからすれば他人事なのだが。

「アンドバリの指輪はどうしたの？」

「先程モ言ツタガ、回収シテアル。」

「アンドバリの指輪といえば、水の精霊の秘宝と言われているね。」

「何か知ってるの、ワールド？」

「むう・・・」

かつて聞いたことがある。」

ーアンドバリの指輪ー

ラグドリアン湖に棲む 水の精霊 が守る秘宝。

指輪の石は水の精霊とほぼ同じ成分の結晶体であり、
数万の兵士の心を奪ったり、死者に偽りの命を与えることが可能と
される。

なお、余談だがモンモランシ伯爵が水の精霊に

「床が濡れるから来るな。用事があればこちらから出向く。」

と言って水の精霊を怒らせたことは、読者諸兄の記憶に新しいことだろう。

（出典…ミン・メイ書房刊

「バリー・ボウルダーの冒険 第7巻 バリー・ボウルダーと水の秘宝」より抜粋）

「なんで言わなかったのよ!？」

「ごめんごめん。忘れてたんだ。」

「ナラバ、水ノ精霊トヤラニ返却スベキガ 筋 ダト考エルガ
主ノ意見ハ如何ニ？」

「そうね。湖に行って沈めましょう。」

モンモランシーでも連れて行けば、スムーズに返却できるでしょうし。」

「その際には、ぜひ僕も立ち合わせてくれ。」

復興の支援を頼みにトリスティンに向かわなければならぬし・・・それはそうと、ハサン殿。」

「ドウシタ？」

「せっかく付けていただいた偽名が無駄になりましたね。」

「使ワヌニコシタ事ハ無カロウ？」

「はは、仰るとおりです。」

こうして、アルビオンでのレコンキスタによる反乱は幕を閉じた。
一行はウェールズを加え、トリステイン王国に戻ることになる。

事後処理 之一（後書き）

2010. 12. 14

閑話（キャラクター設定その1）

に 「真・妄想変身」 追加。

閑話〱バリー・ボウルダー シリーズ〱(前書き)

一 発ネタです。

閑話くバリー・ボウルダー シリーズく

ミン・メイ書房

胡散臭い情報を元に様々な角度から、独自の視点でハルキゲニア各地に伝わる魔法具・伝説・風習などを本にまとめた出版社。

あまりにも胡散臭すぎるため、何度か発禁処分を受けているが斬新な解釈のためか、読者は少なくない。

発禁処分が解かれた現在では、児童書に偽装した「バリー・ボウルダーの冒険」シリーズを発行している。

これらは、過去に出版されたミン・メイ書房の書物を読まないと解けない暗号で書かれており

暗号が解けない者には普通の児童書ではない。

なお、バリー・ボウルダー シリーズ自体は普通に読んだ場合、系統に縛られず、全ての魔法が「対象が凍りつく」という形でしか発動しない少女が、

使い魔とともに成長していくという

一風変わった平民メイジを描いた架空の物語である。

「バリー・ボウルダーの冒険 第1巻 始祖の遺産」

一査問鎖阿蛮徒、懇徒楽賭鎖阿蛮闘一

始祖ブリミルの時代より少し後、使い魔を召喚したメイジは召喚した使い魔と1対1で戦い

勝利することで始めて、使い魔と主従の契約を結んだという。

術者よりも弱い使い魔であれば契約を結ぶのは簡単であるが、術者よりも強大な使い魔と契約を結ぶのは困難を極めた。

また、召喚される使い魔はランダムである為、

ドットクラスの水メイジが火韻龍の召喚に成功したが瞬殺され、残された火韻龍によって町が一つ消えたとする資料もある。

なお、「メイジの実力を見るには、まず使い魔を見よ」というのは、これに起因する。

現在のサモン・サーバント及び、コントラクト・サーバントである。

「バリー・ボウルダーの冒険 第2巻 バリー・ボウルダーとコレクショナルーム」

―場違いな工芸品―

「場違いな工芸品」と呼ばれる品物を見たという読者の方はおられるだろうか？

これは、現在のハルキゲニアのどの国の技術をもってしても製造不可能な品々を総称する。

これらの品々は突然現れるが、その作者、製造方法、用途に至るまで謎とされている。

トリステイン魔法アカデミーにおいては隠語で「E・O・T」とされ、これは

「E…えらく不可解で

O…俺たちには

T…作ることすらできない代物」

の略だそうである。

「バリー・ボウルダーの冒険 第3巻 バリー・ボウルダーと監獄のロッカー」

―???―

現在、増刷中

「バリー・ボウルダーの冒険 第4巻 バリー・ボウルダーと炎の聖灰」

―???―

現在、増刷中

「バリー・ボウルダーの冒険 第5巻 バリー・ボウルダーと東方の忍者団」

—ニンジャー—

ニンジャと呼ばれる東方の暗殺者集団をご存知だろうか？

彼らは魔法を使用せず、己が肉体のみでメイジを倒せるほどの猛者である。

様々な形状のシュリソードと呼ばれる投擲用ナイフ、ネーコノンツメと呼ばれる手甲、ニンジャソードと呼ばれるやや短めのソード、さらには各種毒物、シノビマジック等、彼らの間でのみ伝えられている技術も多数存在する。

また、屋外において闇を作り出す技術も有するとされており、このような闇の中で彼らに襲われた場合、万に一つも助かる術は無いという。

「月の無い晩には気をつけろ」というのは、この戦闘技術に由来するのだろう。

「バリー・ボウルダーの冒険 第6巻 バリー・ボウルダーと王家の疑惑」

—???—

現在、増刷中

「バリー・ボウルダーの冒険 第7巻 バリー・ボウルダーと水の秘宝」

—アンドバリの指輪—

(以下略)

異変？（前書き）

すいません、かなり遅くなりました。

スランプ気味なのか、書きたいことはあるのに、続きが書けないです。

これからも、生暖かく見守ってください。

異変？

ラ・ロシエールから折り返してきた飛行船に乗って、一行はウェールズ皇太子を加え、トリステイン王国に戻った。が、途中で問題が起こる。

「主。」

「何？どうしたの？敵？」

「スマンガ、限界が来タヨウダ。
我ハ、コレヨリ睡眠ニ入ル。」

「え？」

「少々無茶ヲシタノデナ。

ソノ反動ダ。半日以上眠ルダロウ。

1ツダケ言ツテオ・・・ク・・・ガ・・・

我・・・ガ・・・起キ・・・ルマデ・・・

独断・・・デ事・・・ヲ・・・起・・・コシ・・・テハ・・・ナラ・・・

・・・ヌ。

・・・しえ・・・す・・・た・・・」

そう言って、事切れたように倒れるハサン。
胸が動いているので本当に眠っただけらしい。

「あゝ・・・、何と言うか。

使い魔君も、流石に無茶してたっぽいね。」

「1人で反乱軍と渡り合って無傷でしたからねえ。」

眠ったハサンを見て、男2人はそんなことを言い交わす。
唯一ハサンに声をかけられたルイズは

「今までハサンが寝たところなんて見たことがなかったけど、
今日くらいは良いわよね・・・

お疲れ様、ハサン。起きたら、また宜しくね。

でも、何で寝る前にあのメイドの名前が出たのかは
じっくり聞かせてもらおうわ。」

ハサンを見るルイズの顔は、

まるで、『某サイヤ人と地球人のハーフ（長男の方）を見守る、と
あるナメック星人さん』の様に優しかった。

しかし、ワルドとウェールズは後に語る。

「彼女の背後に暴竜の如きオーラが見えた。」と。

ちなみに、グリフォンがビビりすぎてワルドを落としそうにもなっ
た。

そんな珍道中をよそに、トリステインの王城ではアンリエッタが悩
んでいた。

ハサンに言われた「王としての在り方」。

それはいづれ自分が即位した時、

いや、即位しなくても嫌でも向き合わなければならぬ現実。

理想だけで言えば、「民に奉仕する存在」が一番近い。

だが、力無き理想だけでは何も出来ない。

「自らの生き様で道を示す」とは言っても、

20年も生きていない小娘の生き方で示せる道など、たかが知れて
いる。

「民を支配する」だけなら簡単だが、その分だけ民の心が離れるの
も見えている。

ハサンが言ったように、どれも否定することは出来ない。

だから、どれも確かに「正しいのだ」とは思う。

しかし、どれも少しずつ「自分の在り方」とは違うのだとも思っ
ている。

自分の頭でも、それくらいは分かる。でも、何が違うのかまったく
分からない。

アンリエッタは、言われた以外の「王としての在り方」があること
に気づかず、未だに悩んでいた。

密談（前書き）

1ヶ月ぶりの更新です。

お待たせしてスイマセンでした。

書きたいことはあるのに、文章にしにくい・・・

密談

ハサンが目を覚ましたのは翌日の昼過ぎである。

「眠リニ付イタノガ、ダイタイ夜ノ11時頃。
今ガ恐ラク1時カラ2時頃トイッタトコロカ。
予想ヨリ少シ寝過ゴシタナ・・・
デ、ココハ何処ダ？」

完全に無防備に眠っていて、目が覚めるとベッドに入れられていた。
ハサン自身は初めての経験である。

考えられるのはルイズかワルド本人、又はその関係者の家である。
つまり、今のところルイズに危害は及ばない。
そう思い至ったハサンは起き上がると体操を始めた。
体操が終わりかけた頃になって扉が開く。

「お目覚めですか、ハサン殿」

「オウ。小僧、チョウド良イ。
現状ヲ報告セイ。」

入ってきたのはギーシュである。

「えーつとですね。
ハサン殿に帰るように言われた後、
一度学院に戻ったんですけど・・・」

ギーシュが何があったのか話し始める。

ギーシュの回想の要約すると以下の通りになる。

ハサン達に帰るように指示されたので、ギーシュは学院に帰ったのだが

帰った途端に、今度は学院長室まで来るように言われ
オールド・オスマンに報告する羽目になった。

極秘任務だと断ったのだが、オールド・オスマン曰く、
「大体の事情は分かっているから、何があったか教えろ。

この一件は、一つでも処理を誤ると戦争に発展しかねん。」
だそうだ。そこまで言われてはギーシュ個人で責任を取れる話ではない。

仕方が無いので、ハサンに帰るように指示されて別れたところまで
全部説明した。すると、

「公休扱いにするから、ワシの代理として王女の元に行き、今言っ
たことを言ってくる。」

と言われたので、王宮に行ってアンリエッタに面会し事情を説明し
た。

夜も遅くなったので王宮に宿泊することになったのだが、
寝ようとしたらルイズ一行が王宮に戻ってきた。

迎えに行ったら、ハサンが寝ていたので、アンリエッタが客室を用
意させ、ハサンを寝かせた。

「とまあ、こんな具合です。」

「フム、トスルト。」

ココハ王宮ナノダナ？」

「ええ。あ、ルイズは隣の部屋に居ます。」

呼んできましたようか？」

「ソレニハ及バン。小僧、案内セイ。」

ギーシュを伴ってルイズに宛がわれた部屋に行くと
ルイズ、ワルド、アンリエッタ、ウェールズが揃っていた。

「揃ッテオルナ。ドウシタ？
ソンナ不機嫌ナ顔ヲシテ。」

「ああ、使い魔君。ちょっと問題が起きてね。
王女と皇太子の事なんだ。」

アンリエッタとウェールズは恋人である。
しかし、アルビオンが襲われた際に

アンリエッタは他国の王と婚約を交わしてしまった。

陥落後のアルビオンからの侵攻を予想して、

同盟目的とはいえ他国の王と婚約してしまった。

今はアルビオンからの侵攻は考えられないが

婚約してしまった事実が残る。

つまり、アンリエッタはウェールズ以外の人物と結婚しなければなら
ないのだ。

でも、アンリエッタとしてはウェールズ以外との結婚はしたくない。
ウェールズが生きているなら尚更だ。

「ヨクモマア、次カラ次ヘト問題ヲ起コスモノダナ。」

「そう言わないで、ハサン。」

「聞イタダケデ、トリアエズ解決案ハ3ツダナ。」

「「「え?」「」」」

「簡単ナコトデハナイカ。

1ツ。諦メテ婚約相手ト結婚スル。

2ツ。賠償金ヲ支払ッテデモ婚約ヲ破棄スル。

3ツ。死ネ。」

「あんた、いきなり何を言ってるのよ~~~~~!!」

「我ガ思イツイタ解決案ダガ？」

「姫様に死ねっていうの!？」

「言っって良い事と悪い事があるわよ!!」

「死ンダ婚約相手ヲ追イカケテクル様ナ輩ハ居ルマイヨ。

モシ、死ンデマデ追イカケテキタラ、ソノ婚約相手ハ、

ソコマデ王女ニ惚レ抜イテイタノダロウ。

女冥利ニ尽キルデハナイカ。

ソレニ、実際ニ死ヌワケデハナイ。」

例によって懷を探り、1つの林檎を出す。

「林檎？」

「コレハ、『女王スノー・ホワイトの毒林檎』トイウ毒林檎ダ。

コレヲ食シタ者ハ即死スルガ、

食シタ者ヲ心カラ愛スル者ガ、ソノ骸ノ唇ニ接吻スレバ
直チニ解毒サレ、蘇生スル。

アア、心配スルナ。最低デモ7日ノ間ハ死体ハ腐ラン。」

「せっぽん？」

「要スルニ『きす』ダ。」

「それを使えば一時的に死ねるんですね？」
アンリエッタが食いつく。

「ソウナルナ。」

「死んだ後、ウェールズ様にキ、キ、キ、キスして貰えれば
生き返れるんですね？」

顔を赤らめながら、アンリエッタが更に食いつく。

「皇太子ガ、心底ソナタヲ愛シテオレバ、ダガナ。」

アリテイニ言ッテシマエバ、女王ガ接吻シタ方ガ確實ニ生き返ルト
思ウゾ？

余程ノ事情ガ無い限り、子供ヲ愛シテオラヌ親ハ居ルマイ。」

「私、やります！！」

「アン！？」

「私、ウェールズ様を愛していますから。」

「サテ、王女ハコウ言ッテオルガ、貴様ハドウスルノダ、『サー・
ウィンド』？」

「僕もアンが好きだ。やります。」

「結構ダ。サテ、少シダケ『独り言』ヲ言ウガ、気ニスルナ。」

皆が黙ってハサンの『独り言』を聞く。

「死ンデシマエバ、婚約ハ自動的ニ破棄サレルダロウナ。

シカシ、ソノ後ニ行ワレルデアロウ葬式ノ最中ニ他ノ国ノ皇太子ガ、愛シサノアマリ、王女ノ死体ニ接吻シテ、ソノ王女ガ生キ返ッタノナラ、

ソレハ、神ガ二人ノ仲ヲ祝福シタトイウコトナノデアロウナ。

ナラバ、ソノ二人ノ結婚ニ異議を唱エル輩ハ異端デハナイカト我ハ思ウノダ。」

「なるほど。国賊を捕らえることも出来る、というわけか。

策士だね、使い魔君。」

「サテナ。今ノハ我ノ『独り言』ダ。

ドウ取ルカハ、我ノ関知スルトコロデハナイ。」

「僕はアンが好きだし、アンの国をアルビオンの二の舞にさせたくない。」

「ウェールズ様、私もウェールズ様をお慕い申し上げます。」

こうして、アンリエッタの偽装死が決定した。

「トコロデ、小僧。」

「はい、何でしょう。ハサンさん？」

「貴様が考エウル地獄ヲ想像シロ。
想像シタナ？」

「は、はい。」

「モシモ、他人ニ口外シタ場合・・・
ソレガ天国ダト思エルヨウナ『特別訓練』ヲシテヤル。
命ガ惜シケレバ、墓場マデ持ッテイクノダナ。」

密談（後書き）

スノー・ホワイト
『女王の毒林檎』

原典…白雪姫

死体が腐らなかった　って書かれてる本もあったので、ちょっと採用。

初めはハサンを金ぴか王様にして、『王の財宝』から出そうかと思っただけですけど、
ハサンだったら、普通に作れそう。　と思って、『妄想変身』しませんでした。

2011.03.09

一部加筆

出会い

アンリエッタの偽装死で一件落着（？）　　した

ハサン、ルイズ、ギーシュは幾らかの

と言っても、それなりの金額の報酬を貰い、学院に戻ることにしたがハサンが予備のナイフを調達したいと言うので

学院に戻る前に武器屋に寄ることにした。

ルイズとしても働き尽くめで、自分に尽くしてくれる使い魔が

自分の希望を言うのは珍しいので許可した。

そんなわけで現在、一行は武器屋にいる。

「へい、いらっしゃい。」

ウチは武器なら何でも取り揃えておりやす。

今日はこういった物をお探しで？」

「ないふダ。実用ニ耐エラレル物ヲ5本ホド購入シタイ。」

「ナイフですか。暫くお待ちを。」

店主とおぼしき男が店の奥に引っ込み

6本のナイフを持ってくる。

「これなどはお勧めですね。」

かの有名なシュペー卿が鍛え上げたナイフ一式です。」

派手な装飾がされたナイフを自慢気に見せる。

「我が望ムノハ儀礼用デハ無イ。

実戦ニ使エル物ダ。他ヲ見セテモラオウ。」

一瞥してハサンが切り捨てる。

「し、しかしですね。ウチにはこれ以上のナイフは・・・」

「クドイ。3度ハ言ワヌ。」

「悪い事はできねえな。紛い物を売ろうとするから言われるんだよ。」

どこからか声がした。

「喋ル剣トハ面妖ナ。」

ハサンは声がした場所に手を伸ばし、1振りの剣を手取る。

「面妖たあ何でい。ん？」

お前さん、使い手か？おでれーた。」

「使イ手デハナイ。我ハ剣士デハナイ故、貴様ヲ使ワヌ。」

「まあ、そういうなよ。こちとら6000年暇してたんだよ。

俺っちは名剣デルフリンガーだ。聞いたことくらいあるだろ？」

人間だったら、ドヤ顔付きで胸を張ってそんな雰囲気を出しながら自信満々に剣は言う。

しかし、現実^{ハサン}は甘くなかった。

「知ラン。」

親父、他二ないふハ無イノカ？

有ルナラ有ルダケ出セ。」

「もう暫くお待ちを。」

おいデル公、お客様に失礼の無いようにしておけ。
溶かしちまうぞ。」

そう言って、店主は再び店の奥に引っ込む。

「でるふりんがー、貴様恵マレテオルナ。」

「へん、どこがでい。」

あの親父、俺っちが客に何か言う度に
2言目には溶かすだの、壊すだの言うんだぜ?。」

「シカシ、実際ニハソウハナツテオラヌ。
ソウスル機会ハ幾ラデモアツタダロウニナ。」

「お待たせしやした。」

これ以上の代物はこの店、
いや、この国を探してもありませんぜ。」

そういつて無骨な短剣を6本差し出す。

「フム、コレナラ良イダロウ。
幾ラニナル?。」

「6本で金貨30枚です。」

「ソレト でるふりんがー ハ幾ラダ?。」

「あれは金貨100で結構でさあ。
買っていただけるんなら、こっちとしても厄介払いになりやす。」

「・・・親父。」

貴様ハソレデ良イノカ？」

「へ？」

「分カラヌナラ、ソレデモ良イ。
合ワセテ200デ貰ッテイク。異存ハ無イナ？」

「へ、へい。こっちとしても清々しまさあ。
デル公が喧しい時は、この鞆に収めれば黙りやす。
でも、お客様は本当に宜しいので？」

「構ワヌ。デハ貰ッテイク。」

親父、でるふりんがーハ大切ニ使ワセテモラウ。」

そう言う和金貨の入った袋を無造作に置く。

「サラバダ。行クゾ主、小僧。」

店を出て暫くしてからルイズが尋ねた。

「なんで、言い値以上の値段で買ったの？」

「でるふりんがーガ言ッテイタダロウ？」

『2言目には溶かすだの、壊すだの言うんだぜ』ト。
シカシ、実際ニハソウシナカタ。

ナゼナラ、アノ親父ナリニ武器ヲ大切ニ扱ッテイタカラダ。

自分ノ飯ノ種ヲ大切ニ出来ル　アノ男ハ商人ノ鏡ノ様ナ男ダ。
我ハ　ソノ心意氣ニ対価ヲ払ツタダケニ過ギヌ。」

そういうものかとルイズは納得しかける。
しかし、今度はギーシュが尋ねる。

「で、でも。本当は面倒だっただけなんじゃ？」

「小僧、貴様何ヲ聞イテイタ？
アノ男ガ言ツタダロウ？

『鞆に収めれば黙る』ト。

ソレヲ知ッテイテ　ソウシナカッタ。
ソノ理由ヲ考エルノダナ。」

出会い（後書き）

デルフ回収。

こうしてみると原作無視も良いところですね^^;

デルフ回収できそうな機会って、今回逃したら次は何時になるか
自分でも分かんないので忘れないうちに回収しておきました。

- たぶん、ルイズの口喧嘩相手くらいにしか使わないんだろうけど・

閑話 トリステイン式バカテスト（前書き）

ネタです。スルーしてください。

閑話 トリスティン式バカテスト

問1. 現在確認されている系統を全て列挙しなさい。

ほとんどの生徒の解答

地、火、風、水

教師のコメント

その通りです。通常はこの4つに大別されますね。

ルイズの解答

地、火、風、水、虚無

教師のコメント

始祖が虚無系統だったという伝説はありますが、
現在では虚無系統は失われています。

間違いではありませんし、始祖への敬愛を称え正解とします。

極めて一部の生徒の解答

地、火、風、水、爆発

教師のコメント

誰のことかは分かりますが、爆発は系統ではありません。

問2. 始祖ブリミルが使役したとされる使い魔を知る限り列挙しなさい。

ルイズの解答

神の右手ヴィンダールヴ、神の左手ガンダールヴ、神の頭脳ミヨズニルトン、名前を記すのも憚れる者

教師のコメント

その通りです。よく勉強していますね。

モンモランシー他、大多数の生徒の解答

神の右手、神の左手、神の頭脳

教師のコメント

ここまで知っていれば十分ですが、「名前を記すのも憚れる者」もありますよ。

マルコリヌの解答

神の右手、神の左手、万物の母、名状しがたき者

教師のコメント

後半は暗黒神話になってます。

ギーシュの解答

神の右手、神の左手、光あれ、悔い改めよ

教師のコメント

それは「神殺しの電動鋸」で殺せる神様の技です。

閑話 トリステイン式バカテスト（後書き）

やってみただけ。後悔はしてない。

2011. 03. 11

誤字訂正。報告ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5358o/>

暗殺者と魔法使い

2011年3月11日10時23分発行